

【こち亀×ガルパン】こ
ち亀&パンツァー【台
本形式】

神山甚六

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大洗市におけるラジコン大会から始まった、両津勘吉とあんこうチームとの因縁の決着から数か月……

目次

ターミネーター左近寺!の巻 / あん
こうチームの戦車を取り返します!

1

101匹ボコ大行進!の巻(前編) /

ボコボコ大作戦です!(前編) | 47

101匹ボコ大行進!の巻(後編) /

ボコボコ大作戦です!(後編) | 79

ターミネーター左近寺！の巻 / あんこうチームの戦車を取り返します！

〔東京都葛飾区 亀有公園前派出所〕

両津勘吉「ええ?! 戦車道のイベントに私が行くんですかあ?!」

大原大次郎巡查部長「やかましい! いちいち大きな声で叫ぶんじゃない!」ボカッ

両津「あたっ! いちいち殴らなくてもいいじゃないですかあ!!」

中川圭一「部長。戦車道のイベントといいますと」

部長「うん。日本戦車道連盟と高校戦車道連盟が共催する広報イベントでな。毎年、全国大会で優勝した高校の地元で開かれるパレードと合わせて、いろいろとイベントが予定されている。今年は茨城県大洗市で開催される予定だったのだが、例の廃校騒ぎで延期になっていた」

両津「げっ! よりにもよってあそこかよ……」

中川「先輩。大洗に誰か知り合いでもいるんですか?」

両津「い、いや。ちよつと色々あつてな……部長! 私だと色々和不味いんじゃないですか?」

部長「わしだってお前なんぞ派遣したくない。しかしこれは相手側からのたつての希望でな」

中川「大洗女子学園からの?……先輩やつぱり何かしたんじゃないですか?」

両津「何でお前はわしが何かやらかった前提で話すんだ!!ちよつとラジコン大会でハッスルし過ぎただけ……」

部長「ほおう。あれが君の言うちよつとなのかね両津君?」

両津「誠心誠意の反省をいたしております!!」

秋本麗子「いったい何をやらかしたんだか。それにしても大洗女子学園か。優勝校の廃校ということで、マスコミでも色々と問題になったものね」

部長「文部科学省と県教育委員会の方針が二転三転した結果、戦車道のイメージまで悪化しかけたからな。例年より大きなイベントとすることで、風評を払拭したいのだから」

両津「お偉いさんの尻ぬぐいじゃないですか!なんで私がそんなことに付き合わなきゃ……」

部長「ほーう?本庁爆破に、個人情報漏洩、鯉にオオクワガタに大仏にクラス……米軍払い下げの戦車で町中を暴走したこともあったな。多い時には週刊で世間様を騒がせて懲戒免職処分になりかけたお前の尻ぬぐいを、その度にしてきたのは誰だったの

か。もう忘れてしまったと見えるね両津勘吉くん？」

両津「両津巡查長！喜んでお引き受けいたします！」

部長「まったくこの男は……とにかく今回、大会事務局からの要請で、各都道府県警察の代表による柔道大会を急遽開催する事になった。両津、お前は警視庁代表として出席しろ」

両津「そりやかまいませんが。なんで私が指名されたんですか？」

部長「知らん」

両津「知らないって、そんなの無責任じゃないですか！」

中川「戦車道といえば戦国時代の馬術長刀道の流れをくむ女子の武道ですからね。先輩とは縁もゆかりもなさそうなのに」

麗子「やっぱり何か悪いことしたんじゃないの？」

両津「うるさいぞお前ら!!」

両津「部長、勘弁してくださいよ。そりや私はカルチャーセンターで戦車のうんちくに関する授業をやったこともあるし、戦車のプラモやジオラマならモデラー並みに造りこみましたよ。ですけど戦車道は専門外ですよ。あと自家用のシエリダンも持ってますけど、今時そんなのは珍しくありませんよ」

麗子「戦車を自家用車で乗り回している人は珍しいと思うけど……」

中川「よほど大きな戦車道の流派の家元か、先輩ぐらいだろうね」

両津「日替わり定食みたいに、色違いのポルシェやフェラーリを乗り回すお前らには言われたくないわ!」

部長「誰もお前に戦車道の講師をやれとはいってはおらんだろうが。とにかく相手からの指名だ」

部長「お前なら都道府県警對抗の柔道にも出場経験があるからちようどいい。あと、お前ほど都道府県警對抗試合に出場経験が豊富な警官もない」

両津「いきなり南部鉄のメカピーポ君とやらを着させられてレースに参加したのは私ぐらいでしょうしね!あの時は本当に死ぬかとおもいましたよ!!」

中川「部長、この書類によると柔道大会はタッグトーナメントのようですが」

麗子「それにこれ、今週末じゃない」

両津「ぶ、部長!いくら私でもタッグの試合を1人では無理ですよ!」

中川+麗子(大丈夫そうだけど……)

部長「心配しなくてもいい。お前のペアは都道府県警對抗試合に出場経験のあるあいっだ」

*

【大会当日 警視庁亀有署独身寮前】

両津「誰だと思つてたら左近寺じゃねえか。まあお前なら気を使わないからいいか」
左近寺竜之介「随分な、挨拶だな、両津」フンツフンツフンツ

両津「筋トレをしながら話すんじゃない！暑苦しい！」

左近寺「ふう……ところで両津。どうやら俺はゲームのやりすぎで視力が悪くなつたようだ」

両津「藪から棒になんだ？」

左近寺「独身寮の前に、ピンク色の戦車が停車している幻覚が見えるんだ」

両津「幻覚じゃねえよ。それは俺のシエリダんだよ。これに乗つて大洗まで行くからな」

左近寺「……は？」

両津「前に婦警共のキャンピングカーをこれでひっぱつてから、カラーを塗り替えてなかつたんだ。金もつたいなかったし。しかし性能には問題ない」

左近寺「そういう問題じゃないと思うんだが。大体、自家用の戦車つて……」

両津「車検さえごまかせばなんとかなるもんだぞ」

左近寺「警察官の発言とは思えんな」

両津「それはお互い様だろ。それにせつかく戦車道関連の大会に参加するんだから、戦車に乗つていくのも乙なものだぞ……本当は本田のバイクかボルボのジープにでも

乗せてもらおうと思っただが、あいにく2人とも都合がつかなくてな」

左近寺「い、いやしかしだな。色々大丈夫なのか?これ一般道を走れるのか?」

両津「首都高速を走ったこともある。とにかく時間がないんだ。つべこべ言わずにさっさと乗れ!」

左近寺「お、おう」

*

【茨城県大洗市 大洗マリインタワー前 臨時駐車場】

左近寺「つ、ついたか?」

両津「たしかここで大洗女子の連中と落ち合う予定なんだが」

左近寺「両津。少し休ませてくれ……」

両津「情けないぞ左近寺!たかだか2時間弱程度走っただけで。操縦していたわしはともかく、お前はただ乗っていただけだろうが」

左近寺「車と戦車を一緒にするな。風は通らないし熱いし。何より振動が直接臀部に来るのはしんどいぞ。クッションソファでも持ち込めばよかった」

両津「馬鹿いえ!戦車にそんな軟弱なものをもちこむのは、このわしが許さん!」

左近寺「車体がピンク色なのはいいのに、俺にはお前の基準がよくわからん。それに走行中の周りの視線もあつたし……すまんがちよつと飲み物でも買ってくる」

両津「気にしすぎなんだよお前は」

両津「それにここは全国優勝高校の地元だぞ。地元住民だつて戦車なんぞ見飽きている。ほら周りを見てみる。誰もわしらに注目してはいない……」

???『ああああ!!!』

両津「……あん？何だ？どつかで聞いたような声だな」

*

秋山優花里「シエ、シエリダンが！シエリダンがあんな色にいい!!!すごい！すごいけど、すごいですけどお!!!空飛ぶ戦車のシエリダンがああ!!!」

五十鈴華「まあ可愛らしい色」

秋山「五十鈴殿お……そういうことでは、そういう意味じゃ、そういうわけじゃないんです……」シクシクシク

武部沙織「どういうわけよ」

武部「ひよとして今日のイベントに参加する戦車なのかな。私は何も聞いてないんだけどなあ」

武部「あのーすいませーん！」

両津「あん？」

武部+両津「あ」

武部「あああ!!!あの時の不良警官!」

両津「あの時のアングラチームじゃねえか!」

武部「あんこうよあんこう!勝手に国の名前にしないで!」

五十鈴「ご無沙汰しております」

秋山「ああく色は残念だけど、あのアメリカ軍屈指の迷戦車に出会えるなんて!ああ

〜!悲しいけどうれしい!!!生きててよかったあ!」

両津「こいつは相変わらずだな……」

五十鈴「あの一、両津巡查長?」

両津「なんだ?えーと、たしか……いすゞだったか」

五十鈴「五十鈴です」

五十鈴「県立大洗女子学園を代表して、警視庁代表のお二方をお迎えに参りました」

両津「あのチンチクリンはどうした?」

武部「チンチクリンって」

五十鈴「角谷前生徒会長を含めた前生徒会執行部三役は引退されました。現在は私が生徒会長を務めております。副会長はこちらの優花里さんです」

秋山「いやあ。本当にアルミ合金なんですなあ！ノックした時の音と反響が違いますよ！」コンコン

両津「聞いちゃいねえな」

武部「ちよつとゆかりん！駄目でしょ。断りもなくそんなことしちや！」

五十鈴「そしてこのおかん気質丸出しなのが、武部沙織さんです」

武部「華あ！」

五十鈴「本来であれば私が御案内するべきなのでしょうが、このほかにも予定がいろいろと立て込んでおります。試合予定時刻までは、生徒会の広報が両津巡查長と左近寺巡查のエスコート役を務めさせていただきます」

両津「そりやかまわんが、広報つて誰だ」

武部「ちよ、ちよつと華！私、何も聞いてないんだけど!？」

五十鈴「今言いましたから」

武部「そういうことはもつと早く言つてよ！」

両津「いい性格してるな。さすがはあのチンチクリンの後継者」

五十鈴「お褒めにあずかり光栄ですわ」

*

秋山「うう……シエリダン……おいたわしやシエリダン……」

武部「いや、その……でかつ!？」

両津「なんで2回言うんだよ」

武部「そんなこといったって。ボルボさんも大きかったけど、まさか左近寺巡査もこんなに大きいとは」

両津「そりやそうだ。柔道の警視庁代表だぞ」

武部「……そうはいつでも」↑身長157cm

両津「……なんだよ」↑身長152cm

左近寺「？」↑身長182cm

武部「ちっさ」

両津「うるせえよ!!」

左近寺「おい両津。誰だこの娘は」

両津「ああ、そういやお前は初対面だったな。こいつが俺らの案内役だそうだ」

左近寺「そうか。左近寺竜之介だ。よろしく頼む」

武部「(マツチョコもありかも)……(う)ほん!」

武部「えーと!!失礼しました。左近寺巡查。大洗女子学園生徒会広報担当の武部沙織と……『さおりい?!?!』……はえ?」

両津「しまっ魁。こいつも面倒くさい奴だったんだ……」

*

【大洗市役所内 大会運営事務局】

五十鈴「会長。どうもお待たせいたしました」

角谷杏「ははは、今の会長は五十鈴ちゃんでしょ。わたしやただの隠居だよ。でも悪いね。忙しい時に呼び出して」ヒラヒラ

五十鈴「構いません。前会長のお呼び出しとあれば」

五十鈴「……で、こちらの方は？」

角谷「ああ、そうだった。えーと確か警視庁特殊刑事課の」

タイガー刑事「タイガー刑事だ」

五十鈴「はい？」

タイガー刑事「タイガー刑事だ。むろん本名ではないが、気軽にタイガー刑事と呼んでほしい」

五十鈴「はあ……」

角谷「(おーおー、あの五十鈴ちゃんが困ってるよ)」

五十鈴「あの、どうして黒森峰女学園のパンツァー・ジャケットを着ておられるのですか？」

タイガー刑事「こつちが本家の戦車服だ！あの学園が旧ドイツ国防軍をオマージュし

たものを作ったのであって、私は女装が趣味なわけではない!!」クワツ

五十鈴「そうなのですか？」

角谷「(要は自分もコスプレじゃん)」

五十鈴「それで警視庁の刑事さんが、いったい何の御用でしょうか」

タイガー刑事「うむ。私は本来、消防課の所属でタイガー戦車を駆っているのだが」

五十鈴「(消防課? 戦車で?)」

角谷「(突っ込んだら負けだねこりゃ)」

タイガー刑事「私の得た情報によれば、今回、国際的な戦車窃盗集団が日本に入った
そうだ」

角谷「それでこの刑事さんによると、この大洗が狙われている可能性が高いんだって」

五十鈴「まあ、それは困りましたね」

タイガー刑事「全然困っているようには見えんのだが……まあいい」

タイガー刑事「奴らは最近、戦車道の公式試合で活躍した車両に狙いを定めている。
名試合で活躍した戦車となれば、それだけマニアに高く売れるからな。そしてここ最
近、もつとも世界の戦車道で注目された試合は」

五十鈴「大洗連合軍と大学選抜チームの試合ですか」

タイガー刑事「その通りだ。世辞なしに言うが、あの試合は実に素晴らしかった」

五十鈴「ありがとうございます」

タイガー刑事「何としても奴らの犯行を阻止しなければならぬ。そこで是非、大洗女子学園生徒会にも協力を願いたい」

五十鈴「そういう事なら喜んで協力いたします。戦車道関係者にもこちらから注意喚起を」

タイガー刑事「頼むぞ。奴らは何をしでかすかわからんからな」

*

【大洗マリンタワー展望台】

武部「……つまり左近寺巡査は、ギャルゲーのヒロインと私が同じ名前だから奇声を上げたんですか？」ドンビキ

両津「引くな引くな。まあそういう事だな」

左近寺「いや、その、申し訳ない。つい興奮してしまつて」

武部「ゲームがお好きなんですか？」

左近寺「ああ、まあ」

両津「こいつは格闘ゲームからハマった口だからな」

武部「それなら何となくイメージが付きますね。どうせギャルゲーを薦めたのは両津さんなんでしょうけど」

両津「どうせとはなんだ！ どうせとは！」

武部「はいはい」

武部「はい。到着しました。ここが大洗マリンタワーの展望台デッキです」

左近寺「ほう」

両津「周りに大きな建物がないから、なかなかいい景色だな」

武部「そうですね？ 東京スカイツリーとかと比べるとやっぱり」

両津「あれとこれを比べるのが間違ってるんだよ。人間デカけりやいいってもんじゃない。大事なのは中身だ。そうだろう左近寺」

左近寺「お、おう」

武部「小さいって言ったことを根に持ってます？」

両津「一々蒸し返すな！」

*

【大洗市役所内 大会運営事務局】

タイガー刑事「うむ。ではこの警備計画でいこうか。地元県警には私から話を通しておく」

五十鈴「よろしくお願ひいたします。角谷先輩もありがとうございます」

角谷「いいのいいの。ところで五十鈴ちゃん。あの角刈り繋がり眉毛のお巡りさん。

ちやんと来てた?」

五十鈴「両津巡査長ですか? はい。来ておられましたよ」

タイガー刑事「何? 両津がいるのか」

五十鈴「お知り合いですか?」

タイガー刑事「うむ。あいつとは戦車で共に(亀有を)駆け抜けた間柄だ……: そういえばこの間、急に私のところを訪ねてきて私の愛車をパシャパシャと何かの機械で撮影していたが、あれは何だったのだろうか?」

五十鈴「あらまあ……」

角谷「あはは」

*

【大洗市内 戦車倶楽部前】

左近寺「……」

武部「……」

左近寺「(き、気まずい)」

武部「(き、気まずいよう)」

左近寺「(両津め。限定品プラモか何かしらないが、いきなり戦車倶楽部の前で戦車を止めて、入っついていきやがった)」

武部「(女の子相手ならいいんだけど、年上の男の人なんて何を話せばいいの？両津さんがないと間が持たない……)」

左近寺「……」

武部「……」

左近寺+武部「あ、あの」

左近寺「……どうぞ」

武部「……いえ、左近寺巡査からどうぞ」

左近寺「(うおおお！さおりい！俺に力を貸してくれえ!!)」

武部「(……お見合いか!!)」

武部「(ええい！女は度胸よ!) ……あ、あの」

左近寺「……なんだ」

武部「(こ、こわっ!) ……あの、左近寺巡査も葛飾署なんですか？」

左近寺「そうだが」

武部「じゃああの、ウサギさんの形をした警察署で勤務されていたんですね」

左近寺「そうだが、あれは使いにくい建物だった」

武部「えー!かわいいじゃないですか?」

左近寺「見ているほうはそれでいいんだろうけどな。有名な建築家か何か知らないが、中身はまるで迷路だったぞ」

武部「確か御免ライダーの撮影にも使われたんですよね」

左近寺「そうだが。君は特撮マニアなのか」

武部「いえ私は違いますけど。後輩に特撮が好きな女の子がいました」

*

阪口桂利奈「ふあつくシヨーン!!」

山郷あゆみ「わっ!」

大野あや「ちゃんとハンカチを口にあててよー」

阪口「えへへ、ごめんごめん。間に合わなくて」ズズツ

澤梓「風邪?」

阪口「違うと思うんだけど」ティツシユナイ?

宇津木優季「なんとかは風邪をひかないんだよね」キラシテルノ」

阪口「ひっどーい!」

丸山紗希「……ティツシユ」

阪口「ありがとう紗季ちゃん!」

*

武部「それで、そのウサギさんチームも戦車をピンク色に塗ったことがあるんですよ」

左近寺「ほう。やっぱり女子は戦車をピンク色に塗りたいがるものなのか」

武部「それは違うような気がしますけど……」

左近寺「……どうかしたか？」

武部「あのっ」

左近寺「うん？」

武部「さつきはごめんなさい」

左近寺「何がだ？」

武部「あの、ギャルゲーの事です」

左近寺「いや、あれは俺が悪かったんだ。名前が一緒だからつい、な」

武部「確かに同じ名前というだけであれだけの反応だったのは吃驚しましたけど。そうじゃないんです」

左近寺「というと」

武部「左近寺さんの好きを否定しちゃった感じがして。それが申し訳なかったと思いますして」

左近寺「無理をしてオタクのノリについてこなくてもいいぞ」

武部「いや、そういうことじゃないんです。確かに左近寺さんの言動にびつくりしたのは事実なんですけど。どう言えばいいのかな」

武部「私は人の好きを否定したくないんです」

武部「みんなそれぞれ、好きなものが違うと思うんです。華……生徒会長の娘は華道が好きで、ゆかりんは戦車が好きで。あんこうチームのみんなもそれぞれに好きなものがある。うちの戦車道のチームも、それぞれ好きなものが違います。ゲームだったり、バレーだったり、車だったり」

武部「だから私は何かが好きって感情は、とつても大切なものだと思うんです。何かが好きだから、人の好きも尊重出来る。だから私は人の好きを否定したくないんです」

武部「私が人に嫌われたくないから、自分がいいかつこをしたいだけかもしれないですけどね」

左近寺「……そうか」

武部「だからこれは、私の勝手な謝罪なんです。正直あれはむつとしましたけどね」

両津「いや、それは確かに大事なことだ」

武部「つげ!両津さん!」

両津「お化けが出てきたみたいなの反応するんじゃないよ」

両津「でもお前も、案外いいこと言うじゃないか。さすがは全国大会優勝校の代表メ

ンバーだな」ナデナデ

武部「ちよ、ちよつと！勝手に頭を撫でないてくださいいよ！」

両津「がっはっは！頭を撫でてもらえるうちが花つてもんだ。わしなんか部長にしょつちゆう頭をどつかれている」

武部「部長さん？ああ、あのT-14で殴りこみに来た」

左近寺「両津。お前ここで何をやったんだ？」

両津「余計なことを思い出させるな！」

左近寺「……（人の好きを否定したくないか）」

*

【大洗市役所内 大会運営事務局警備本部】

タイガー刑事「おお！西住みほではないか！」

西住みほ「あはは……ご無沙汰しています。タイガー刑事さん」

タイガー刑事「うむ！先の大学選抜との試合は実に素晴らしかったぞ！」

秋山「西住殿はタイガー刑事殿とお知り合いですか？」

みほ「お知り合いうるか何というか……」

みほ「タイガー刑事さんは黒森峰機甲科の非常勤講師なの」

秋山「え?!タイガー刑事殿が?!」

冷泉麻子「こいつは男だろう」

みほ「タイガー刑事さんは、タイガー戦車の砲身の先に括り付けた筆で習字が出来る位に運転が上手だから」

冷泉「……は？戦車の砲身？筆？」

秋山「人間業じゃありませんね」

冷泉「いや。でもそれは改造した戦車じゃないのか？」

みほ「戦車道のレギュレーションに対応した戦車でもやってたよ」

冷泉「」

タイガー刑事「ははは！伊達にタイガー刑事を名乗ってはおらんぞ」

みほ「そういえばタイガー刑事さんはどうしてこちらへ？」

タイガー刑事「うむ。実は――」

警官A「た、大変です！」

タイガー刑事「どうした！」

警官B「展示会場へ運搬作業中だったレッカー車が何者かに襲われました！」

タイガー刑事「何い?!……っち！負傷者は！」

警官A「警備兵と運転手は無事との連絡がありました！」

五十鈴「タイガー刑事」

タイガー刑事「おお！五十鈴君！心配はいらない。こんなこともあろうかと、何かあった場合には輸送車のエンジンが動かなくなるよう遠隔操作システムが作動するようになっている。それに大洗女子学園の自動車部に依頼をして、車両には移動用の最低限を除いて燃料を抜いてある。今頃、犯人共は立ち往生しているはずだ」

警官B「戦車に乗って逃亡しました」

タイガー刑事「ズルツ

タイガー刑事「どうして展示用の車両に燃料が入っているんだ!!」

警官A「それが当該車両はデモンストレーション用に使用する車両だったので1試合分の燃料が」

秋山「え！デモンストレーション用?!」

みほ「という事は、盗まれたのは……」

警官B「はい。あんこうチームのIV号戦車です」

*

【大洗市内 名平洞公園前】

武部「あれ？」

両津「なんだ？どうかしたか」

武部「それが、あんこうチームのIV号戦車が公園駐車場の中にあるの。おかしいなあ。デモンストラーション会場のあるアクアワールド・大洗前に移動する予定だったと思っただけだ」

左近寺「会場が変更になったんじゃないか?」

武部「それなら私の携帯に連絡があるは(p i p i p i p i p)……非常連絡?ちよつと御免なさい」

武部「はいはい。どうしたの華」

五十鈴『緊急です沙織さん。落ち着いて聞いてください』

武部「どうしたの華。怖い声出して」

五十鈴『移動中のあんこうチームのIV号戦車が、窃盗集団の襲撃を受けて盗まれました』

武部「つ……!」ダッ

両津「おい武部!おいどうした!!」

五十鈴『沙織さん!聞こえていますか沙織さん?車両には……』

左近寺「おいどうした両津!あの娘、急に飛び出していったぞ!」

両津「ぼさつとせずに追いかける!」

泥棒A 「へっへっへ、ちよろいもんですね親分」

泥棒B 「おう。戦車道のイベントに紛れてしまえば移動していても疑われない。俺の読みはドンピシャだったろ？」

泥棒C 「いよっ！親分!!ズルいことを考えさせたら日本一！」

泥棒B 「馬鹿野郎！世界一だ！……それにしてもDは遅いな」

泥棒A 「干し芋食べ過ぎてお通じが良くなりすぎたんじゃねえですかい？」

泥棒B 「ははは。ちげえねえや」

武部 「こらあ！あんたたちい!!」

泥棒C 「うおっ」ビクッ

泥棒B 「何だ何だ?!」

武部 「あんたら戦車泥棒ね！観念しなさい！」

泥棒A 「な、なにを言うんですお嬢ちゃん。私どもは大会運営事務局から委託を受けた輸送業者で……」

武部 「わたしがその大会運営事務局の広報担当よ！」

泥棒B 「げえ！」

泥棒D「……ふう。すつきりした。お待たせしました親分。いやあ、ひさしぶりにすっごいのが……」

泥棒B「馬鹿野郎!早く乗れ!おいエンジン始動!出るぞお前ら!」

武部「あ!こら!待ちなさいあんたら!!」

泥棒C「動かしますぜ!」

泥棒A「あ、やばい!親分。あの娘つ子が公園の出口で立ち塞がってますけど、どうします?」

泥棒B「かまわねえからそのまま進め!何、戦車が近づけば怖気づいて飛びのくに決まってる!」

武部「……っ!」グツ

両津「……あの馬鹿!おい武部!右だ!右に飛びのけ!」

武部「やだっ!!」

両津「……っ、畜生!間に合え!」

泥棒B「(な、なんでどかねえんだ!)おい、エンジン逆回転しろ!」

泥棒A「ま、間に合いませんよ!」

泥棒C 「うおおお！どいてくれえええ!!」

左近寺 「うおおお!!」 (真横からスライディング)

武部 「きゃー!」ズサササ……

泥棒B 「(あつぶね!) いよっしや!そのままっつきれ!」

泥棒C 「は、はいいい!!! (よかったああ!!!)」ブロロロ

両津 「まで手前ら! あ、ちつくしよう、待てこら! 戦車を降りて勝負しやがれ!!」

武部 「はっはっ……」

左近寺 「はー……」

両津 「おい武部!! 怪我はねえか!」

武部 「は、はい「馬鹿か君は!!!」……ひゃん!」

左近寺 「怪我をしたらどうするつもりだったんだ!」

武部 「で、でも、戦車が……」

左近寺 「でももしかもない! 俺が飛び込まなければ、君は死んでいたかもしれないんだぞ! 君のその行動が、君の友達をどれだけ悲しませると思っっているんだ!」

両津「おい左近寺」

左近寺「両津は黙ってろ！」

武部「で、でも！」

左近寺「……すまん。ちよつと言い過ぎた」

武部「わたしこそ。お礼も言わずに……でも駄目なんです！」

武部「あの戦車は！あの戦車は、私たちあんこうチームの大切な戦車なんです！」

武部「楽しい時だつて悲しい時だつて、あの戦車と一緒に戦ってきたんです！」

武部「みほりんと私たちの大切な居場所だから、だからっ……！」

両津「わかつたわかつた」

両津「おい左近寺。いいかげんその娘っ子の肩から手を放してやれ」

左近寺「あつ……す、すまん」

武部「ごめんなさい左近寺さん。助けてもらったのに」

両津「お前さんの好きつて気持ちには、わしらがしっかりと受け取ったぜ」

両津「さあ、反撃開始だ!!」

*

泥棒A「いやあ、よかつたですなあ。女の子轢かなくて」

泥棒B「うるせえ！黙って表見張ってろ！」

泥棒? 「俺は指示に従っただけ、俺は指示に従っただけ……」ブツブツ

泥棒D 「腹減ったなあ……あん?」

泥棒? 「……親分」

泥棒A 「うるせえ! そもそもお前がトイレに行こうなんて言うから」

泥棒? 「ピンク色の戦車が、サイレンつけて追いかけてきましたけど」

両津 「はっはっはー! どけどけどけえ!!!」ファンファンファンファンファン

武部 『緊急車両が通ります! 道を開けてください! 緊急車両が通ります! 道を開けてください!』

武部 「ちよと両津さん! いいのこれ!」ファンファンファンファンファン

両津 「サイレンつけたら普通車だつて覆面パトカー扱いになるんだから問題ない! それよりも周囲への呼びかけと注意喚起を続ける!」

武部 「どうなつても知らないからね! …… 『緊急車両が通ります! 道を開けて……あ! 見つけたぞ泥棒! 私たちの戦車を返せええ!!!』 ファンファンファンファンファン

泥棒? 「よ、よかった。あの娘、怪我無かつたんだな」

泥棒A 「そりゃよかつたけどよ。どうします親分。追いかけてきましたぜ」

泥棒B 「ど、どうするって、そりやおめえ……逃げるつきやねえだろ」

泥棒? 「砲塔を旋回させて、デモンストレーション用の模擬弾をぶっぱなしましょうや」

泥棒B 「そ、それだ!」

泥棒A 「(……Dが一番危ない奴なんじゃね?)」

武部 「それにしてもこの戦車すごいね。クーラーこそついてないけど、中身は最新式じゃない」

両津 「そうじゃないと車検が通らなかつたからな……」

左近寺 「おい両津。相手が砲身を旋回したぞ」

両津 「なんだって?まさか撃つつもりか?」

武部 「それがどうしたのよ!戦車道の模擬弾だから大丈夫でしょ!」

両津 「あー、うん。そんな君に残念なお知らせがあるんだが」

両津 「この車両はもともと戦車道のレギュレーションに対応していない……だから特殊カーボンが装備されていない」

武部 「は?」

両津 「ついでに言うのだ。さつき秋山って娘がはしゃいでいただろ?アルミ合金だつ

て。この戦車は水陸両用で、パラシュート降下にも対応出来るように開発された。いろいろと問題はあったんだが、実際に改造すれば海の上も走れるぐらいには軽い」

左近寺「……つまり」

両津「……模擬弾であっても、装甲を貫かれる可能性が極めて高い」

武部「もうやだー!!!」

泥棒? 「装填完了。いつでもいけますぜ親分」

泥棒B「うむ。だがしかし……」

泥棒? 「つかまったら親分、当分臭い飯ですぜ」

泥棒B「……ええい! ままよ! 出来る限り当てるんじゃねえぞ! 主砲発射!!」

泥棒? 「イエッサー!」

左近寺「撃ってきた!」

両津「うおおおおお!!! わしのドライビングテクニックを舐めるんじゃねええ

!!!!

武部「きゃああああ!!!!!!」

*

【大洗市役所内 非常対策本部】

刑事A「タイガー刑事。ドルフィン刑事が那珂川の河口に係留していた窃盗団の船を確保しました」

タイガー刑事「うむ。結構」

五十鈴「ドルフィン刑事? イルカさんですか?」

みほ「華さん。あの人たちは私たちの物差しには当てはまらない人たちだから、そういうものだと思って聞き流しておいたほうがいいよ?」

秋山「西住殿の目が死んでおられます」

冷泉「よほどつらいことがあったんだろう。そつとしておいてやれ」

タイガー刑事「それでみほ君。このポイントでいいんだね」

みほ「はい。この地点に船に係留してあったということは、この橋を通らなければ対岸には渡れませんから」

タイガー刑事「うむ。その通りだな……さて諸君。いよいよファイナーレだ」

冷泉「いつ始まったんだ?」

秋山「そういう事は言いつこなしですよ冷泉殿」

タイガー刑事「全部隊に通達！海門橋を封鎖せよ！」

みほ「（あ、この人これが言いたかったただけだ）」

*

泥棒B「撃て撃て撃てえ!!撃って撃って撃ちまくれええ!!」

泥棒A「ハッピートリガーの気があつたのかな？」

泥棒C「自分じゃ撃たないくせに」

泥棒?「そんなにポンポン撃てませんよ。模擬弾の数も沢山はないのに」

泥棒B「貴様ら！何を腑抜けたことを！逮捕されたら臭い飯なんだぞ！」

泥棒A「でも一番責任重いのは親分でしょうし」

泥棒C「最悪俺らは、親分に言われたからやったといえばいいだけなんで」

泥棒B「き、貴様らああ!!泥棒の風上にも置けん奴らだ!!!」

泥棒?「あの親分」

泥棒B「なんだあ?!」

泥棒?「相手が背後まで迫ってきました」

両津「はっはっはー！時速80キロを出せるわしの改造シエリダンが、最大40キロ

前後しか出せないI V号に駆けっこで負けるかよ!!」

武部「ちよっと!うちの子の悪口言わないで!」

両津「言葉の綾だ!まったく、うちの婦警共と同じぐらいうるさい奴だな」

両津「おい左近寺!泣いても笑ってもチャンスは1回こつきりだ!外すんじゃねえぞ!」

左近寺「わかっている」

武部「あ、あの左近寺さん!」

左近寺「……なんだ」

武部「……け、怪我をしないでくださいね!」

左近寺「まかせろ。両津ほどじゃないが、俺も頑丈さには自信があるからな」

*

【大洗市役所内 非常対策本部】

警官B「上空旋回中の県警航空隊ドローンの映像はいます!」

タイガー刑事「うむ。みほ君の予想通りだな。相手は順調に海門橋に向けて進行を続けている」

冷泉「なあ、この人はここの指揮官なんだよな」

秋山「そうですね。警視庁の偉い刑事さんだそうですよ」

冷泉「さつきから西住さんの言った通りにしか動いてないように見えるんだが」

秋山「まあいいじゃないですか。西住殿の実力が認められていることの証左なんですから」

冷泉「秋山さんはそれでいいかもしれないが……」

警官A「映像メインモニターに移します」

「「「おおっ……」」」

タイガー刑事「……なんだあのピンクのシエリダンは何？」

五十鈴「両津巡査長のシエリダンだと思われませう」

タイガー刑事「つぶ。あいつもつくづく悪運が強い男と見える」

???『……つもしもしも！もしもーし！』

五十鈴「沙織さん！大丈夫ですか?!今どこに」

武部『ピンクの戦車の中！泥棒を追いかけてるところ!』

五十鈴「えええええ?!?!」

秋山「ちよ、え?あのシエリダンに武部殿が?!」

みほ「……っ!華さん貸して!」

みほ「沙織さん、聞こえますか」

武部『みぼりん!』

みほ「沙織さん。両津さんに伝えてください。逃走ルートと思われる海門橋の封鎖は完了しました。船も確保してます。出来るのなら、このまま海門橋に相手を追い込んでください。ただしシエリダンは装甲が不安です!決して無理をしないでください!!」

両津『はっはっは!聞こえてたぜ!』

みほ「両津さん!」

両津『あいかわらなず無茶な要求を平気な顔して言う娘だ。任せてろ!お前の大事な友達も、大切な戦車もちゃんと取り戻してやるからよ!!』

みほ「はいっ!」

警官A「ピンクのシエリダン、I V号戦車に急速接近!このままだと衝突します!」

タイガー刑事「何だと?!」

*

武部「いっけえええ!!!!」

両津「ベルトしっかりしめてろよっ……覚悟しやがれ盗人ども!!」

* みほ「沙織さん、両津さん!!!」

* 泥棒 A 「うおつとつと！」

泥棒 B 「何だ何だ?!」

泥棒 C 「こ、コントロールが。クツソ！何か当たったか?!」

泥棒? 「親分！敵戦車が後方から衝突したものの、相手の前方装甲が大破したようです！離れていきますぜ！」

泥棒 B 「何?!でかした!!」

泥棒 C 「ふ、ふう……よかった」

泥棒 B 「ご苦労だった！お前らよくやってくれた。あとはこのまま予定の場所まで運べば」コンコン

泥棒 A 「……?」

泥棒 B 「……何か音がしたか？」コンコン

泥棒 C 「天井のハッチからノックみたいな音がしませんか？」

泥棒 B 「まさか。何か当たってるんだらう。おいA。すまんがハッチ開けてゴミを

とつてきてくれ」コンコン

泥棒A 「了解です」

泥棒? 「……まさか」コンコン

泥棒A 「まったく。ようやく片付いたと思ったのに……よっころせつと」

左近寺 「よう泥棒共。警視庁だ」

泥棒A + B + C 「二で、出たああああ!!!」

泥棒? 「ははっ……終わった」

*

警官B 「ハッチ開きました!左近寺巡査が中に……1人を放り投げました!」

秋山 「せ、戦車から戦車にジャンプして乗り移るなんて」

冷泉 「ターミネーターかよ」

五十鈴 「そうですか? 私達にとっては見覚えのある光景の気もしますが」

みほ 「え?私?」

秋山 「いや五十鈴殿。停止中に飛び移るのと走行中の場合とは難易度が桁違いですか

ら

みほ「え？そんでもないよ？」

秋山「え？」

みほ「え？」

冷泉「西住流ってなんだ」

警官A「目標、速度落とします！……停止！目標は行動を停止しました！」

みほ「状況終了です！皆さん、お疲れさまでした！」

タイガー刑事「うむ。これにて一件落着！」

冷泉「いいのかそれで」

タイガー刑事「怪我人が出ないのが一番！これも戦車道よ！」

五十鈴「消防隊じゃありませんでしたか？」

*

【翌日 都道府県警對抗柔道大会決勝会場】

主審「一本！それまで!!」

王大河「強い！強すぎる！これが日本の首都警察の実力だ！優勝は警視庁代表の左近寺選手・両津選手です！」

わあああああ!!!!!!

武部「きやー!!左近寺さーん!」ブンブン

冷泉「まーた沙織の悪い癖が。いつまで続くことやら」

秋山「まあ無理ありませんよ。あれだけ目の前で活躍されちゃいましたからね」

冷泉「確かにすごかったな。まさか1人で戦車に乗り込んで4人を縛り上げるとは思わなかった」

秋山「白馬の王子様と呼ぶにはいささか汗臭いかもかもしれませんが、そこがいいんでしょうね」

五十鈴「吊り橋効果というやつでしよるか」

冷泉「それだな」

武部「きやー!!左近寺さーん!かっこいい!!」ブンブン

みほ「……」

秋山「どうされました西住殿。顔色が良くありませんよ」

みほ「う、ううん?!何でもないよ!」

五十鈴「そうですか?無理をなさらないでくださいね!」

みほ「う、うん!」

みほ「(……どど、どうしよう)」

みほ「(……「左近寺さんには彼女がいる」って両津さんから聞いただなんて、今更言えないよう)」

武部「左近寺さーん!!!」ブンブン

*

【柔道大会授賞式会場】

両津「おやおや左近寺くーん？女子高生にひどく人気じゃありませんかー？」

左近寺「他人事だと思って……」

両津「わしだって自家用車のシエリダンを犠牲にしたのに、大洗の学生新聞のトップはといえば、お前が戦車の上に飛び乗った写真ばかり！経済的な損害は俺のほうが大きかったんだぞ!!保険会社は保証の対象外だとかぬかしやがるし……」

両津「しかしお前があんなに熱くなるなんて珍しいな」

左近寺「そうだな」

左近寺「……あの娘は俺の好きを認めてくれた。だからかもしれん」

両津「おい左近寺。条例違反はいかんぞ」

左近寺「ば、馬鹿!そんなじゃないぞ!大体俺には……」

両津「はいはい。そういう事にしておいてやるよ」

???「やあやあ両津巡査長。ご苦労様だったねー」

両津「……あつ!出たなチンチクリン!」

角谷「チンチクリンとはずいぶん言い草だね。自分だつて成人男性の平均身長よりは下なのに」

両津「うるせえよ!」

両津「大体、お前だろ!わしをここに呼んだのは。一体何のようだ?」

角谷「あれ?そうだったっけ?」

両津「しらばつくれるな!大会事務局からわしを名指しで指名があつたと……」

???「それは私がお願いしました」

両津「お、おう?……あの、失礼ですがどちらさんで」

???「自己紹介が遅れて申し訳ありません。両津巡査長」

西住しほ「私、日本高校戦車道連盟理事長の西住しほと申します」ペコリ

両津「は、はあ……ということはあのあんこうチームの」

しほ「私の不肖の娘です……今はそれは関係ありませんと言いたい所ですが」

しほ「高校戦車道連盟会長として、今回の事件解決に対する両津巡查長、並びに左近寺巡查の御協力に感謝いたします」ペコリ

両津「こりやどうも。態々ご丁寧に（なんとというか）」

左近寺「ど、どうも（すごい圧だな）」

しほ「……さて両津巡查長」

両津「は、はい？」

しほ「この映画に見覚えは？」スツ

『亀有工業戦車物語』

両津「」

両津「え、ええ……と。公務員は副業を禁止されています」

しほ「あなたがその程度の内規など気にもされないことは調査済みです。またこの映画の原作となった深夜アニメについて、貴方が企画段階から関わっていたことも」

両津「あつ、はい」

しほ「都庁、首都高、雷門、仲見世通り……ハリウッド映画とはいえ、ずいぶんと無茶をしてくれましたね」

両津「い、いやそれはあくまで映画の話であつてですね。あとでちゃんと関係各所に理解は得ましたよ？」

しほ 「その点を問題にしているわけではありません」

両津 「は、はあ」

しほ 「私は日本戦車道連盟の世界大会誘致の責任者をしているのですが、海外の戦車道関係者と会談するたびに、この映画の話題を持ち出されます」

両津 「はあ……（何が言いたいんだこのおばさんは？）」

しほ 「実に良い映画でした。スクールウォーズの流れを汲みつついささか荒唐無稽ながらも大胆かつ繊細。戦車を通じた青少年の更生と成長がきちんと物語として紡がれていました」

両津 「そりやどうも、ありがとうございます？」

しほ 「……おかげで得心がきました。何故日本が誘致活動を開始すると表明しただけで、あれだけ喜ばれていたのか」

しほ 「この映画のおかげで、世界の戦車道界では日本は戦車道があらゆる場所で開催可能という、とんでもない誤解が出来上がっています」

両津 「」

しほ 「誘致責任者として実にやりがいのある日々です。ええ、毎日のように誤解を訂正するための仕事に追われ、ただでさえ少ない家族と会う時間がどんどん削られていくのですからね。ええ。このお札をどう差し上げたらよいのか悩みに悩みましたとも。

ええ」

両津「い、いやあ。お礼だなんてそんな。それにそのお礼という言葉の意味をめぐっては理事長と私との間で認識のずれがみられるような。というわけで本官はこのあたりで失礼を……」

しほ「待ちなさい」ギユウウウウ

両津「いてててて!!肩、肩、肩あ!!」

しほ「そう言うわけでして、今回は両津巡查長をわが西住流のブートキャンプに御招待しようと思ひまして、こうしてお呼び立てした次第です」

両津「いててて!お気持ちだけ、お気持ちだけで十分ですからあ!!」

しほ「まあまあ、遠慮なさらずに……じゃあ角谷さん。これ連れていきますので、あとは宜しく」

角谷「あつ、はい」

両津「はいじゃねえ!!おい左近寺!助けてくれ!!」

角谷「左近寺さん。駅まで乗っていきませんか?あんこうチームが乗せていくといつてますので」チラツ

左近寺「わかった」チラツ

両津「左近寺い!!!!」

しほ「大原部長からも『是非とも鍛えてやってください』という暖かいお言葉をいた
だいております」

両津「あのちよび髭ええ!!!」

しほ「さあ行きましようか。南部鉄の着ぐるみ(?)を着こなした貴方ならばと、ボ
コミュージアムからも打診が来ていますよ。私も思う存分憂さ晴ら……もとい。鍛え
がいのある生徒だと聞いています。失望させないでくださいね」

両津「ふざけんなこら!おいつ……!おい!こんなものありか?!!」

両津「もう戦車道なんてこりごりだー!!」

【完ー】

101匹ボコ大行進!の巻(前編) / ボコボコ大作戦 です! (前編)

【新葛飾署 署長室】

屯田五目須署長「えー、そういうわけで両津。このベアポリスの着ぐるみを、ボコられクマのポコに作り替えてほしい」

両津「どういうわけですか!」

次長「署長。モコです、モコ」

署長「おお、そうだった。このポンポコに……うん?」

次長「署長、タンポコです……あれ?」

両津「いつまで漫才をやってるんですか?」

署長「うるさい! えーっと、とにかくこのボコられクマのボコボコ」

両津「ボコが一つ多いですよ! ボコですよボコ」

署長「そう! そのボコに作り替えてほしい」

両津「だからどういうわけなんですか!?!」

署長「い、いや。実はだな……」

島田千代「私からお話ししましょう」

両津「どこから出てきた!？」

*

【数日前 島田本宅】

島田愛里寿「お母さま。お願いがあります」

千代「どうしたの愛里寿？」

愛里寿「まずはこのニュース動画をご覧ください」タブレットピツ

ピツ!ピツ!ピツ!ピツ!

千代「……ピ〇チュウの等身大の着ぐるみね」

愛里寿「その通りですお母さま」

愛里寿「これは毎年8月に横浜で開催されるピカ〇ユウ大量発生チュウ!というイベントのニュース映像です。100体以上のピカチュ〇が更新する姿はまさに圧巻の迫力。『バルジ大作戦』においてパットン戦車軍団がアルデンヌの森を突破した圧巻の記録映像を思い起こさせます」

千代「まあ確かに……これだけ同じ着ぐるみが集まると可愛いこともさることながら、一種異様な迫力があるわね(お仕事とはいえ、8月に着ぐるみは大変でしょうねえ)」

愛里寿「ホイッスルに合わせた一糸乱れぬ足並みの行進。これは戦車道の一例縦隊訓練にも通じる要素があると考えます」

千代「そ、そうかしら？」

愛里寿「その通りです」ウンウン

愛里寿「そこでお母さまにお願いがあり「却下」……な、何故ですか?!」

千代「貴女のことです。大方、ボコでこの大行進が見てみたい。でも自分の欲求だけを素直に口にするのは憚られる。だからボコムニュージアムの新しいイベントとして提案してみよう……などという考えから、ボコの着ぐるみによる大行進を私に提案するつもりだったのでしょうか。違いますか？」

愛里寿「流石ですお母さま」ウンウン

千代「駄目です」

愛里寿「な、何故ですかお母さま!?!」ガーン

千代「貴女の考えを肯定するわけではありませんが、客観的に考えれば100体以上の着ぐるみが一糸乱れず行進するイベントは、話題性としては悪くはありません。マスコミとタイアップすればボコムニュージアムの知名度を高めることも難しくはないでしょう」

愛里寿「で、では何故!?理由を、納得のいく理由を教えてください!」

千代「『二番煎じ(笑)』とネットで叩かれるのが目に見えているからよ!」バン!

千代「大体、元々のボコミュージアムのアトラクションについては貴女も知っているでしょう!ボコーテッドマンションにスペースボコンテン……どれもこれもどこかのパークで聞いたような名前ばかり。おまけにアトラクションの中身まで似せているのよ!」

愛里寿「お母さま。メインのイツツ・ア・ボコワールドを忘れていただいているは困ります」ドヤア

千代「アウトよアウト!!セーフだとしても完全に限りなく黒に近いグレーゾーンよ!!!」バンバン!

千代「安請け合いして出資にゴーサインを出した私も確かに不注意でしたが、まさか公式がサザエボン紛いの海賊版商法をやっているだなんて思いもありませんでした!」

愛里寿「(……サザエボンって何?)」

千代「今思い出しても眩暈がします。改修工事の検討会議に出席した元の運営会社出身職員達の、頭の悪い大学生の大学祭みたいな確信犯と悪乗りの数々!危ないアトラクションを撤去するどころか、『新しいライバルに黒いネズミのカップルを出しましょう!』とか『青い狸を出しましょう!耳さえつけければわかりやしませんよ』などと聞かされた時の気持ちだが、貴女にわかるというの!」バンバンバンバン!

愛里寿 「は、はあ」

千代 「はあ、はあ……」ゼイゼイ

千代 「と、とにかくです。来客数の一時的な回復により慢性的な赤字体質は脱却しつつあるものの、正直なところ現在のボコモジュールですら持て余しているのです」

愛里寿 「そ、そんなっ！」

千代 「私も島田の女です。貴女との約束を守るためにも出資は続けるつもりです。ですがこれ以上の火種を抱え込むことは、我が島田流にとつても命とりになりかねません」

愛里寿 「お母さま……」

千代 「駄目なものは駄目です（……ごめんなさいね愛里寿。でも私には島田流に対する責任があるの。どうか弱い母を許して）」

愛里寿 「もう一緒にお風呂に入るのやめようかな」ボソツ

千代 「あーもしもし？ボコモジュールの責任者を呼び出してもらえる？そう、大至急の最優先事項で頼むわね」

*

千代「—というわけですか」

両津「どういうわけだあ!!」

千代「これは申し遅れました。私、日本大学戦車道連盟理事長の島田千代と申します。

今回は私共の申し入れを快く受け入れて頂きまして、感謝いたしております」

両津「戦車道関係者というのは、どいつもこいつも人の話を聞かないのか?」

署長「(お前がそれを言うのか) まあ両津。落ち着け」

両津「これが落ち着いていられますか!」

署長「こちらの島田さんは戦車道の名門島田流の家元でもあらせられる」

両津「それがどうしたっていうんですか」

千代「新葛飾署の広報活動は以前から興味深く拝見していました。とかく四角四面な警察組織の中でこれだけ自由な発想が出来るとは、思いもよらないことでした」

署長「ありがとうございます(上から押し付けられただけなんです)」

署長「そこでだ両津。倉庫にあるベアポリスの着ぐるみだ。あの時は全署員分を用意したから合計で300体近くあるだろう」

両津「あると思いますけど、あの後色々使い回しましたからね。軍人将棋とか野菜とか(あとサルとか)」

千代「(軍人将棋?)」

署長「あるのならいい。島田さんはその着ぐるみをボコに改修すれば、ボコミュージ
アムで買い取ってもよいと提案されておられる」

両津「どうせわしに改修作業をやれというんでしょ？」

署長「その通りだ。そして島田さんはこの条件を我が署が引き受けた場合、お前に任
せている戦車課……戦車博物館となつて久しいが、島田流として活動に協力してもよい
とおっしゃつておられる」

両津「」ピクッ

千代「陸上自衛隊と連携する西住流と対抗するわけではありませんが、我が島田流は
警察における戦車道の普及にも取り組んでいます。その一環として、我が島田流は新葛
飾署の戦車課に対して戦車道レギュレーションに対応した1945年以前の車両を提
供する用意があります。人材育成や整備員の派遣に関してもお任せください」

両津「いやいや、ちよつと署長……ていうかあんた」

千代「なんででしょう？」

両津「聞いている限りだと、それだとわしはお払い箱じゃねえか。戦車道に男の出
幕はないだろうし。わしは自分で戦車が乗り回したいのであつて、整備やマネージャー
をやりたいわけじゃない」

署長「少しは自分の本音を隠さんか！」

千代「(……)つち。これじゃあ駄目か。噂通りね) 両津巡査長。お耳を拝借」

両津「あん?なんだよ……」

千代「確かに戦車道の公式試合では男性の参加は認められていませんが、私的なものに関してはその限りではありません」ボソボソ

両津「だからそれが何だっていうんだ。個人で好き勝手に乗るのなら今と変わりないじゃねえか」ヒソヒソ

署長「あの、目の前で堂々と密談しないでほしいんですけど……」

千代「話はここからです。女性警官の戦車道チームを率いる男性警官の監督がいても、私はいいと考えています」ボソボソ

両津「それで?」

千代「新葛飾署には見目麗しい女性警官が多いとお聞きしています。仮に戦車道チームが発足した場合、パンツァー・ジャケツトについては貴方に一任するつもりです。またそれに関する広報活動については、私の関与するところではありません。どうぞ御自由」

両津「是非とも本官にお任せください!!」両目\$マーク

千代「まあ心強い!新葛飾署にその人ありと(悪名)名高い両津巡査長の御協力をいただければ、まさに100人力ですわ!(戦車道の普及も出来て一石二鳥ね。何か問題

になつたら責任押し付けちやおう」ホーツホツホツホ！

次長「……署長。宜しいのですか？」

署長「うーむ……（不安だ……）」

*

【新葛飾署 倉庫】

両津「あのケバい理事長め、まさか101体も要求するとはな。人の足元見やがって」

本田「なんで僕まで手伝わされるんですかあ〜」

両津「そこにいたからに決まってるだろ」

本田「わかつてます。言ってみただけですよ……」

本田「それで、これが以前の広報活動で使ったクマの着ぐるみですか」

両津「もうほとんど原型留めてないけどな」

本田「たしか子供の野菜嫌い対策のために野菜に仮装した時は胴体部分を、サルマラソンでは頭も含めて改造して使い回しましたよね」

両津「特殊刑事課の麻雀刑事や軍人将棋刑事が出向して来た時にも一部を改造して使ったな。しかし改めて言葉にしてみても意味のわからない広報行事ばかりだったな

……」

本田「今更じゃないですか？」

両津「とにかくこれが300体近くあるが、使いまわしていた胴体部分の劣化は酷いもんだ。これを補修してボコられクマのボコに改修しなければならぬ。イベントの後にはボコミュージアムが買い取ってくれるそうだが、もっとも戦車道の車両提供と引き換えに、値段は相当買いたたかれるだろうがな」

本田「それにしてもボコですか。懐かしいですねえ」

両津「知っているのか本田？」

本田「ええ。伊歩が好きなアニメでしたから、それに付き合ってよく見させられました」

両津「そりやちようどいい。実はわしもボコについてはよく知らんだ。相当マイナーなアニメだったということは知ってはいるが、西住の家元もそのあたりはちゃんと説明しなかったからな」

本田「西住流?このボコ作製を依頼したのは島田流じゃないんですか?」

両津「いや。まあちよつとそれは大洗、というか熊本で色々あってな」

本田「(何をしたんだろう)」

両津「それで、どんなアニメなんだ?」

本田「正式名称はたしか『ボコられクマのボコ』というタイトルでしたね。このボコつ

ていう名前のクマは、自分から相手に喧嘩をしかけるんですけど、いつも負けるんです。だからいつでも傷だらけで包帯をつけているんです」

両津「なんだそれは？クマのくせにマゾなのか？」

本田「そうじゃありません。負けても負けても立ち上がり、それでも負ける。だけど戦うことを諦めないというのが、ストリーというか話のテンプレートだったはずです」

両津「負けを認めなきや敗北じゃねえってことか？うーむ。哲学的だな」

本田「そんなに良いものじゃないと思いますよ。それにボコの話になると伊歩はちよつと怖くて」

両津「怖いって……あの伊歩ちゃんが？」

本田「なんといいますが、ボコに対しては真剣というか、こうガチなんですよ。話題を振ったら最後、2時間は必ず付き合わなきやいけなくて……で、肝心の着ぐるみの方はどうですか？」

両津「どうもこうも。ある程度予想はしていたが、生地痛みが酷いな。特に中に入った人間を固定するための固定ベルトや視野を確保するためのメッシュは、量販品で間に合わせていたからかボロボロだ……うん？この迷彩色のは部長の使ったやつだな。さすがにあの世代はきつちりしてる」

本田「マラソンに使ったものはほとんど駄目ですね。この保管状況だと、脱いだまま

倉庫に突っ込んだというものも多そうですし」

両津「着ぐるみはこれが困るんだ。汗染みは時間がたつと取れなくなるし、そこにカビが発生しやすくなる。傷んだ生地は元に戻らないからな。ちゃんと洗濯にかけて乾燥していればそんなことはないんだが。まったくどいつもこいつも着ぐるみは税金で買ったということを忘れてるんじゃないのか?」

本田「そ、そうですね(勝手にベアポリスをサルに改造した上に、ゲリラ的に都内でマラソンを開催した先輩に言われても説得力がありませんけど)」

両津「うーむ。思ったより胴体部分に痛みの激しいものが多い。ボコは腕と足が太いから、元のベアポリスの着ぐるみだとアンバランスになるから作り直さなきゃならんし。ニコイチしても足りるかこれ?」

本田「これなら新しく作ったほうが早いかもしれませんね」

両津「……新しくか」

*

【スーパ―電子本社】

両津「とうわけだ。力を貸せ」

電極スパーク「どういうわけだ!」

スパーク「全くいつもいつも唐突にやって来て。君は私を22世紀から来た青い狸か

なにかと勘違いしているんじゃないのかね？」

両津「永遠の子供探偵の博士ポジションが絵崎だからな。あつちは資金力の乏しさを突拍子もないアイデアで補うタイプだが、ある程度の自由がきいて金と技術もあるお前は色々と便利で使いやすんだよ」

スパーク「せめて言葉を取り繕う努力ぐらいせんか!!」

両津「そう冷たいことを言うな。ゲーム機のピュー太郎で華々しく爆死しかけた時に助けてやっただろ？」

スパーク「ピュー吉だ。ピュー吉。全く恩着せがましい奴だ……それで？」

両津「これだ」ドサツ

スパーク「……着ぐるみか。それにしてもどうしてこのクマは包帯塗れなんだ？」

両津「こういう仕様なんだよ」

両津「この中に搭載する補助AIと装備一式がほしい。冷却装置は一般的なので構わんが、排気機能だけはしっかりと。視野は360度をカバーする昼夜対応の赤外線仕様、あと戦車道で使う特殊カーボンをギリギリまで薄くした上で内部に張り付けたい」

スパーク「待て待て待て。色々と言いたいことはあるが、ちよつと待て」

スパーク「まず特殊カーボンだと？そんなものを内部にベタベタと貼り付けたら身動

きが取れなくなるぞ。あれは炭素繊維でありながらダイラタンシー流体のような特性を持つ奇跡の素材だからな」

両津「つい最近までは原理もわからずに試合に使用していたからな。まったく戦車道をやっている連中は頭のネジが外れているとしか思えん」

スパーク「(お前にだけは言われたくないと思うぞ)」

スパーク「だからこそ特殊カーボンは通常の炭素カーボンとは異なって加工が難しいことは、お前も知っているだろう。戦車道の場合は装甲の間に張り付けるだけでいいが、人型のサイズにまで加工するにしても限度があるぞ」

両津「着ぐるみの中全てに張り付けるつもりはねえよ。何も戦車道の試合に使うってわけじゃないんだから。人間が着ぐるみを着て、ある程度乱暴なプロレスをするぐらいの衝撃に耐えられたらそれでいいんだ。既存の技術でも、その程度の大きさの小型化は出来るだろう」

スパーク「簡単に言うな! 素材メーカーがお前の言うその程度の小型化に、どれほど苦しんでいると思っているんだ?」

両津「まあそのあたりはお前に任せる。それと特殊カーボンと補助AIを連携させてみたい。モニターやセンサーにこだわったのもそれが理由なんだが。あらかじめ周囲の状況を把握させておいて、予想される衝撃を計算して、一定以上のダメージが及ぶと

判断した場合に特殊カーボンの機能を強化させるシステムを作りたい」

スパーク「戦車道の試合では砲弾が装甲に命中した場合、周囲の特殊カーボンが一時的に硬化して内部の搭乗者を守るからな。しかしそのための補助AIをIからプログラムミングしろというのか？どれほど時間がかかるかわからんぞ」

両津「自動車の衝突被害軽減ブレーキあるだろ？あれを応用出来ないか？カメラから得た情報をコンピューターで処理させて、強い衝突が予想される時だけカーボンが作用するようにしたいんだ。そうすれば普段の動作には支障が出ないだろう」

スパーク「だから簡単に言ってくるな！」

スパーク「自動ブレーキシステムに関してはおわが社が中川自動車と共同開発中のものがあるが、さすがに最高機密のそれを使うのは無理だ」

両津「心配いらん。テストということで中川自動車の了承は得てある」

スパーク「……どうせまた開発部門を口八丁手八丁で丸め込んだだけで、中川（圭一）社長の了承は得ていないのだろう」

両津「じゃあ辞めるか？いいんだよ別に？こっちは絵崎コロ助に頼めばいいんだから」

スパーク「待て。誰もやらないとはいっていないだろう」

両津「無理するなよ。出来ないんだろ？出来ないんなら素直に認めろよ」

スパーク「わが社の技術力を侮るなよ両津。それにアイデアとしては面白い。やってみよう」

両津「よっし!契約成立だ!(よっし!ただで材料費ゲット!)

スパーク「はっはっは、任せておきたまえ(ちようど実験台が欲しかったところだ。データ収集だけしておいて、何か問題が発生した場合は両津のせいにしておこう)」

*

【超神田寿司】

擬宝珠纏「おい勘吉。なんだこれは!？」

両津「見りやわかるだろうが着ぐるみだよ。ほら前に署員全員が着させられたあれだ」

纏「そういうことを言ってるんじゃないよ!包帯まみれの着ぐるみを持ち込むなって言ってるんだ」

両津「かくかくしかじか」

纏「どういうわけだよ!」

両津「わかんねえ奴だな。つまりは着ぐるみのリサイクルだよ。島田流はただで着ぐるみと人員の確保が出来る、新葛飾署は戦車道導入に向けて島田流の協力得られる上に着ぐるみの在庫処分が出来る、スーパー電子は開発中だったシステムの実地テストが出

来る。全員丸く収まるという、わしの実に素晴らしいアイデアだ」

纏「お前の素晴らしいアイデアとやらは、最後はいつもお前自身が欲をかい破綻するからな」

両津「ほつとけ！」

纏「ところで着ぐるみの人員ってまさか」

両津「うちの署員に決まってるだろう」

纏「どう決まってるんだ！」

両津「安心しろ。纏もちやんと人員に数えてやるからな」

纏「人の話を聞け!!」バンバン!

両津「規律ある集団行動や訓練は警察官の御家芸だろうが」

纏「そういうことを言ってるわけじゃねえってわかって言ってるよなお前。つまり何か? またこのクマの着ぐるみを着ると?」

両津「そうだ。何もミニパトに箱乗りしろとは言わねえよ。こういう感じで行列で行進すればいいだけだから」タブレットピッ

ピッ! ピッ! ピッ! ピッ!

両津「簡単だろ?」

纏「……私は断る!!」

両津「署長命令だぞ!!」

纏「勘弁してくれよ……」

両津「ちなみに改修後のキャラクターはこれな」

オイラボコダゼ!

オレガアイテダ!カカッテコイ!

チクシヨ、マタマケチマツタゼ!

纏「……何だこりゃ?」

両津「こういうキャラクターらしいぞ」

纏「何が悲しくてこんな情けないクマに……」

??? 「ボコは情けなくないぞ」

纏「檸檬?」

擬宝珠檸檬「ボコは情けなくなんかないぞ」

両津「なんだ檸檬。お前もこれ知ってるのか?」

檸檬「知ってる」

両津「お前がアニメを見ていたなんて意外だな」

檸檬「通販番組と水戸黄門の再放送の間に何度も何度も再放送していたからな。嫌でも覚えた」

両津「タイムテーブルの穴埋めかよ……」

檸檬「それとマトイ。ボコは情けなくなんかないぞ」

檸檬「ボコは確かに弱い。自分から喧嘩を仕掛けて、いつも返り討ちにあっている」

檸檬「だけどボコは自分を曲げないんだ。何度負けても、そのたびに立ち上がる。ボコボコにされても自分を曲げないんだ。だってそれがボコだから」

纏「お、おお、そうか。そうなんだな（……わかるか勘吉？）」

両津「そ、そうだな（わかるような、わからんような）」

檸檬「ふうむ……2人にはボコ道はまだ早いと見えるな」ヤレヤレ

檸檬「それでイチロー。どうしてボコの着ぐるみを作っているのだ？」

両津「それはかくかくしかじかで」

檸檬「なんと！ボコの大行進が見られるのか?!」パアア

両津「そうだが」

檸檬「マトイ！見に行きたい！見に行きたい!!」ピョンピョン！

纏「お、落ち着け檸檬。母さんとも相談しなきゃいけないし」

両津「うーむ。最初から集客など期待していなかったが、これ意外と儲かるかもしれない

んな)」

*

【数日後 県立大洗女子学園艦 生徒会長室】

バツターン!

西住みほ「会長!生徒会長!」

角谷杏「西住ちゃん。だから私は前会長なんだけど。あと部屋に入る時はノックしてくれると嬉しいかな」

みほ「そんなことはどうでもいいんです!これ、これ見てください!」

角谷「どうでもいいって……えーと何々?『101匹ボコ大行進!ボコ大発生中だボコ!』?何、このどこかで聞いたことあるような、何ともコメントしがたいタイトルのイベントは」

みほ「ボコミュージアムの新しいイベントです!どうですか!」ズイツ!

角谷「いや、どうですかって言われても……ねえ?小山」

小山柚子「そうですねえ(これどう考えてもピカチュウ大行進のパロディだよね)」

みほ「そういうわけで、この日の戦車道の練習を全休にすることを提案します!!」

角谷「(どういうわけだよ)いや、まあ一日ぐらいはいいとは思うけどさ」

みほ「実は愛里寿ちゃんからチケットをもらってるんです!ほら!!」

角谷「そ、そう。なるほどね。ようやく得心がいったよ。愛里寿ちゃんもボコが好きだったけ？」

みほ「はい！」パアア

角谷「(おーおー、いい顔して笑うなあ)」

小山「(本当に西住さんはボコが好きなのね)」

角谷「ところでかーしまはどう言ってるの？一応、あれが今の隊長なんだし」

小山「一応って」

みほ「快く承知してもらいました！」

角谷「そ、そう(この勢いに押し切られたんだらうなあ)」

角谷「でもボコのイベントなんだから、西住ちゃんだけお休みとつてもいいんじゃないの？一日ぐらいならかーしまにとつてもいい訓練になると思うんだけど」

みほ「は？」

角谷「」

みほ「ボコのイベントですよ？1001匹のボコが大集合して大行進するんですよ？」

角谷「わー！すごいねー！チケットも頂いたことだし、そりや是非にでも行かなきゃ

ねー!(棒読み)」

みほ「そうなんです!」 パアア

小谷「(……だから朝の練習の後、あんこうチームの皆の目が虚ろだったのね)」

みほ「その言葉が聞きたかったんですよ!ボコと一緒にボコムニージャムでボコボコ大作戦の開始です!」

角谷「(まんまじゃん)」

みほ「はい、これ会長の分です!」

角谷「え?私?」

みほ「戦車道履修者全員分のチケットをもらいましたから!」

角谷「」

みほ「残念ながらアヒルさんチームはバレーの練習試合、レオポンさんチームは自動車レースへの助っ人参加、カモさんチームの風紀委員会はサメさんチームの船舶科と共同での避難訓練、アクリイさんチームはゲーム大会への参加、カバさんチームはそれぞれに用事があるので不参加なんですけど」

角谷「(あいつら逃げやがった!)」

小山「(不?戴天の風紀委員とどんだ底のメンバーが組むなんて)……う、ウサギさんチームは?」

みほ「愛里寿ちゃんと会えるんだよと伝えたら、喜んで参加するといってくれました！」

小山「そ、そう」

角谷「(確信犯じゃないよね?)」

みほ「河嶋先輩も出席してくれるそうです!」

角谷「えっ?かーしまが?(あいつボコ好きだったかな?)」

みほ「はい!それとなく副隊長もいろいろと大変なんですよということを懇切丁寧に
お伝えしたら、涙を流して是非とも参加させてほしいと」

角谷「」

小山「(えげつない。西住流まじえげつない)」

みほ「会長、いえ前会長。この日は予定ありませんよね?だってもともと練習日だったんですから」

小山「(いきなり退路を断ってきた!?)」

角谷「え、えーと。どうだったかなあ……」

みほ「私もチケットを融通してくれた愛里寿ちゃんの悲しむ顔は見たくないんです」

小山「(桃ちゃんの泣き顔はいいの?)」

みほ「会長もぜひ参加してくれませよね!」

みほ「ね？」

角谷「」

*

こうして始まった両津の監督監修による着ぐるみ改造計画(inボコ)。

スーパー電子の全面支援と協力の下、両津は101体の着ぐるみをボコへと改修。

新葛飾署地域課を中心に集められた警官達は、ボコの着ぐるみを着用の上で訓練を開始した。

最新鋭の補助システムが搭載されたボコの着ぐるみは、まさにロボットと表現しても差し支えない仕上がりとなっていた。

そしてイベントの本番を迎える。

*

【茨城県 ボコミュージアム イベント当日】

王大河「さあ始まりました。西に西住流あれば東には島田流あり!臨機応変の神出鬼没で世界にお馴染みのニンジャ戦法で名高い戦車道の島田流がプロデュースするボコ

ミュージアムの新たなイベント! 『100匹ボコ大行進! ボコ大発生中だボコ!』の開
始予定時刻まで、あと1時間余りとなりました!」

王「果たして戦車道とボコに何の関係性があるのか。そのような疑問を抱えつつ司会
進行を行いますのは、時給1215円という学生としては破格の金額ながら、声のお仕
事としては正直ぼったくり価格以外の何物でもない条件にホイホイと飛びつき、貴重な
青春時代を切り売りすることを余儀なくされています悲劇のヒロイン! 茨木県立大洗
女子学園艦のお昼の大人気報道番組『アンコウステーション』の司会兼キャスター兼プ
ロデューサーでお馴染み、大洗女子学園放送部の王大河です! どうぞよろしく!」

マエフリガナゲーヨメガネ

メガネハヒツコメー

オヨビジャーネーダヨメガネ

メガネー

王「眼鏡は関係ないでしょうがあ、眼鏡はあ!？」

児玉七郎「おっほん!」

王「どうも失礼しました」

王「解説は日本戦車道連盟理事長の児玉七郎さんです。児玉さん、どうぞよろしく」

児玉「よろしくね(テンション高いなあ)」

王「兎玉さんはボコについては如何お考えですか?」

兎玉「いやそれが実際のところよくわかってないのよね。今日も島田流の家元に呼ばれてきてみたら、ここに座らされただけなんで」

王「(無視して) はいよろしく願います」

つながり眉毛ボコ(両津)『……グダグダじゃねえか。司会進行があれで大丈夫なのか?』

右手包帯茶色ボコ(??)『あの先輩』

つながり眉毛ボコ(両津)『なんだ。というか誰だお前』

右手包帯茶色ボコ(中川)『中川ですよ。内部の画面モニターに表示されてるでしょ?』

つながり眉毛ボコ(両津)『おお、そうだったな。悪い悪い』

右手包帯茶色ボコ(中川)『電極社長から聞いたんですが、このスーツにうちの自動車会社が開発中の衝突被害軽減ブレーキシステムを流用したって本当ですか?』

つながり眉毛ボコ(両津)『ああ、あれな。使わせてもらったぞ』

右手包帯茶色ボコ(中川)『やっぱり……勘弁してくださいよ。あれうちの機密技術ですよ?』

つながり眉毛ボコ（両津）『なーに、お前も結果を出せば文句はないだろう』
右手包帯茶色ボコ（中川）『そういう問題じゃないんですけど……』

つながり眉毛ボコ（両津）『既に聞いているかもしれないが、ボコというキャラクターの性質上、着ぐるみを着たアクションは避けられない。今回は行進だけだが、実際のアクションでは必ず負けなければいけない。よってある程度の衝撃に耐える構造が必要だ』
つながり眉毛ボコ（両津）『そこでお前のところの自動制御ブレーキシステムと、スーツ内部に張り付けた特殊カーボンをリンクさせた。衝撃をあらかじめセンサーで測定して、コンピューターに予測させる。一定以上の衝撃が予想されると判断した場合、対象部分のカーボンの性能を発揮させるというものだ。これなら普段の着ぐるみを着たアクションには問題がないし、万が一の大きなダメージから中の人間を守ることも出来るだろう』

右手包帯茶色ボコ（中川）『いつも思いますが、よく色々と思いつきますね。しかし本当にそんなことが可能なんですか？』

絵崎コロ助教授「不可能を可能にする天才！それが私だよ中川くん!!」

つながり眉毛ボコ（両津）『つげ?!どこからわきやがった、この似非英国紳士?!』

絵崎教授「ご挨拶だねゴリラくん。いったい誰のおかげでそのスーツのシステムが開発出来たと思ってるんだね?」

つながり眉毛ボコ(両津)『ま、まさか……』

絵崎教授「そう。スーパー電子の依頼を受けたこの私。不可能を可能にするこの天才が開発した『E Z A K I・M k—II』!それこそが、君のスーツに搭載された補助AIの名前なのだよ!」

つながり眉毛ボコ(両津)『おいスパーク!スパークのバカ野郎はどこいった?!』

右手包帯茶色ボコ(中川)『この後、横浜で会議の予定があるとかでさつきフライングスーツで飛んでいきましたけど』

つながり眉毛ボコ(両津)『あの野郎、横田進入管制区に突っ込んで米軍に迎撃されりゃいいんだ!』

絵崎教授「まーまー、安心したまえゴリラくん」

つながり眉毛ボコ(両津)『いちいち語尾を伸ばすんじゃない!』

絵崎教授「さすがの私もこの短時間の間に101体分のAIを用意することは時間的に不可能だった。そのため『E Z A K I・M k—II』のプロトタイプを搭載した着ぐるみは、残念ながらゴリラ君の1体分しか用意できなかったのだよ」

つながり眉毛ボコ(両津)『ふざけんなこらあ!どこが安心出来るんだあ!!』

右手包帯茶色ボコ（中川）『せ、先輩！落ち着いてください!!』

絵崎教授「ふっふっふ。では説明してしんぜよう。ゴリラくん。私を殴ってみたまえ」

右手包帯茶色ボコ（中川）『きよ、教授?!』

つながり眉毛ボコ（両津）『上等だこの野郎！ハロルド・ロイド気取りの丸眼鏡を吹っ飛ばしてやる!』ブンブン

絵崎教授「はいポチっとな」

つながり眉毛ボコ（両津）『ウワー、負けちまったぜ〜（どわあああああ!!!）』ゴロゴロゴロゴロ……

右手包帯茶色ボコ（中川）『せ、先輩?!先輩のボコからアニメ声が?!』

絵崎教授「ふっふっふ。これが『E Z A K I・M k―I I』の最大の特徴。ボコシステムだよ。ある一定以上の衝撃や、外部からの信号によって自動的にボコとして行動するようにプログラミングしてある。30の行動パターンとそれに合わせた台詞もセツトしてあるぞ。これでスーツアクターやスタントマンがボコについて詳しくなくても、誰でも今日からボコになるという優れものだ!」

つながり眉毛ボコ(両津)『やってやるぜ!(何しやがるてめえ!)』ブンブン

右手包帯茶色ボコ(中川)『先輩、何を言っているのか分かりませんが』

つながり眉毛ボコ(両津)『おう、俺とやろうっていうのか?(元に戻せこら!)』ブンブン

絵崎教授「確かにこれでは何を言っているのかわからんな。ほい」ポチツ

つながり眉毛ボコ(両津)『絵崎、この野郎!よくもやってくれたなあ!!』

絵崎教授「ポチつとな」

つながり眉毛ボコ(両津)『やられちまったぜ!(どわああああああ!!)』ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……

*

つながり眉毛ボコ(両津)『ひ、ひでえ目にあつた……』

左手包帯黒色ボコ(??)『両ちゃん大丈夫?』

つながり眉毛ボコ(両津)『誰だお前』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『私よ私』

つながり眉毛ボコ(両津)『麗子か。モニターに名前が表示されるまでにタイムラグがあるな。それにしても「私、私」だけだと固定電話の特殊詐欺みたいだな』

右手包帯茶色ボコ(中川)『先輩。絵崎教授から伝言です。よほどの衝撃を与えられな

い限りは『E Z A K I・M k— I I』は発動しないようにしておいたので、安心してほしいそうです』

つながり眉毛ボコ（両津）『どこが安心出来るんだ!!』

左手包帯黒色ボコ（麗子）『ところで両ちゃん。これ本家のピカチ〇ーは全て同じ色みたいだけど、どうしてこのボコは全部色や服装を変えたの?』

つながり眉毛ボコ（両津）『ボコミュージアムからの希望だな。それにそうしないと誰が誰だか分らんだろうが』

左手包帯黒色ボコ（麗子）『今でも誰が誰だかわかってないじゃない』

背中に傷があるボコ（?）『おい勘吉!』

つながり眉毛ボコ（両津）『えーと、その声は纏か』

左手包帯黒色ボコ（麗子）『やっぱりわかってないわよね』

つながり眉毛ボコ（両津）『ウ〇ーリーを探せの間違い探しじゃねえんだ!全部の色と中身の人間を覚えてられるか!』

背中に傷があるボコ（纏）『おい勘吉!漫才している場合じゃないんだ。聞け』

つながり眉毛ボコ（両津）『なんだよ』

背中に傷があるボコ（纏）『檸檬が迷子になった』

【
続
く
】

101匹ボコ大行進!の巻(後編) / ボコボコ大作戦 です! (後編)

【ボコミュージアム 正面ゲート】

みほ「ついにやってきましたボコミュージアム!」ババーン

「「「おぉー……」」」ズーン

みほ「ど、どうしたんですか皆さん。テンションがストリツツヴァグン103の車高並みに低いですよ?」

秋山優花里「……スウェーデンの第2世代に相当する主力戦車、通称Sタンクですね

……説明聞きます?」

武部沙織「今はちよつといいかな……」

秋山「はい。私も言ってみただけですので……」

みほ「本当にどうしたの!?!」

秋山「ははは……(西住殿が楽しそうなのは何よりなのですが)」

武部「(愛里寿ちゃんの好意を無碍にするのも悪いしね)……むしろみほりんはどうし

てそんなにテンションが高いの?」

みほ「だってボコですから!」

武部「だよね(うん、知ってた)」

秋山「えーと、メインイベントのパレードは午後からですか」

五十鈴華「長丁場になりそうですね。ここはしっかりと腹ごしらえをしておかなければ」モグモグ

武部「もう食べてるし……」

五十鈴「それにしてもこう言つては何ですが意外と……いえ失礼。案外と賑わつていますね」モグモグ

冷泉麻子「五十鈴さん。それ訂正になつてないから。あと食べながら話すのは良くないぞ」

五十鈴「けぷっ……たまに羽目を外すのも悪くはありませんよ?」

冷泉「(聞いちゃいないな)……ところで前生徒会の3人とウサギさんチームはどうしたんだ?」

みほ「河嶋先輩は御姉妹と回られるそうなので、私たちとは別行動です」

武部「へ、へー、そうなんだあ(その手があつたか!)」

冷泉「成程(あの先輩にしては上手な手を考えたな)」

秋山「ウサギさんチームは愛里寿殿と待ち合わせをしているそうでした。角谷先輩と

小山先輩は『1年生だけだと心配だからついていくよ』と

みほ「そうなんだ」

冷泉「逃げたな」

五十鈴「御一緒出来ずに残念ですね」モグモグ

武部「……華、そのフランクフルト何本目？」

五十鈴「まだ4本目です」モグモグ

*

檸檬「(しまった)」

檸檬「(大量のボコに喜んで駆け出した結果、迷子になってしまった)」

檸檬「(初めての場所で迷子になった時は身動きしない方がいい。そうイチローに教えてもらったけれど)」

??「……？」

??「あの。貴女」

檸檬「……っ！」

??「ひよっとして迷子？」

檸檬「(綺麗な人だな)……そうじゃ」

??「じゃあ私と一緒に迷子センターにいかない?」

檸檬「ありがとう。でも知らない人についていてはいけないって言われてるから」

??「……確かにそのとおりね」

??「じゃあ自己紹介しよ?」

檸檬「え?」

愛里寿「相手がだれか分かれば、もう知らない人じゃないでしょ?」

檸檬「そ、そうなのか?」

愛里寿「うん。それに貴女のカバンについてあるキーホルダー」

檸檬「これか?」カバンモチアゲル

愛里寿「そう! 神田明神限定のボコのキーホルダーでしょ」

檸檬「そ、そうなのじゃ! よくわかったのう!」

愛里寿「ふふふ。ボコが好きの人に悪い人はいないからね」フンス!

愛里寿「私の名前は愛里寿。島田愛里寿っていうの。これでも大学生なんだよ」

檸檬「だ、大学生?(プラスよりも少し大きいだけに見えるが)」

愛里寿「貴女のお名前は?」

檸檬「檸檬。擬宝珠檸檬じゃ」

*

背中に傷があるボコ（纏）『駄目だ。迷子センターにはいなかった!』

つながり眉毛ボコ（両津）『園内放送は!?!』

背中に傷があるボコ（纏）『母さんに頼んだ!もうすぐ放送が始まるはずだ!』

迷彩色模様のボコ（??）『おい両津!』

つながり眉毛ボコ（両津）『えーと、えー、ええい!誰だお前?』

迷彩色模様のボコ（部長）『わしだ!』

迷彩色模様のボコ（部長）『今、ボコミュージアムの職員に説明して施設の出入口に連絡を回してもらった。擬宝珠君が提供してくれた檸檬君の顔写真も回してある。見かけた場合はすぐに連絡を入れるそうだが、何せこの人込みだからな』

つながり眉毛ボコ（両津）『うち!』バシンツ!

モヒカン眼帯ボコ（??）『うおおお!!両津のダンナあ!!』ブロロロ……キイツ!

つながり眉毛ボコ（両津）『本田か!』

モヒカン眼帯ボコ（本田）『ミュージアム周辺の警備と交通整理にあたっている茨城県

警に掛け合ってきたぜ!連絡と写真を回してもらった!』

つながり眉毛ボコ（両津）『よし!』

つながり眉毛ボコ（両津）『部長、ちよつとわしも探してきます!』

右手包帯茶色ボコ(中川)『先輩、でも今その格好で施設の中を動き回っては逆に身動きが取れなくなるのでは?』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『そうよ両ちゃん。もうすぐイベントが始まるから園内に入が増えてきたし、逆にパニックになる可能性もあるわよ』

つながり眉毛ボコ(両津)『檸檬を放つてはおけんだろうが!』

ベレー帽着用ボコ(??)『両津巡查長』

つながり眉毛ボコ(両津)『なんだ!……って、あんたか家元。今悪いがちよつと忙しいんだ』

ベレー帽着用ボコ(島田千代)「ミュージアムの全職員の手末に連絡を回しました。最優先で探させましょう。必要とあればパレードの延期もやむをえません」

つながり眉毛ボコ(両津)『そりゃ有難いが……いいのか?』

ベレー帽着用ボコ(千代)「当然です。その娘さんも、我がボコミュージアムの大切な将来のお得意様になるのですから」ニコ

つながり眉毛ボコ(両津)『つへ!戦車道をやってる連中はどいつもこいつも夏春都みたいな素直じゃないやつばかりみてえだな』

ベレー帽着用ボコ（千代）「（……何故ドイツの対空戦車と比べたの？）」

つながり眉毛ボコ（両津）『部長、それじゃあ行ってきます！』

迷彩色模様のボコ（部長）『よし、行ってこい両津！』

職員A「（シリアスな会話してるだろ。でもボコの着ぐるみを着たままやつてるんだぜ。これ）」

職員B「（いまいち緊張感に欠けるよなあ）」

職員C「（どうでもいいけど家元は着る必要あったか？）」

＊

ピンポンパンポーン　マイゴノオシラセデス。トウキョウトチヨダクカンダカラオ

コシノ……

角谷「いやあ、助かったよ。西住ちゃんのボコ談義は長いからねえ」

澤梓「あはは……（否定出来ない）」

阪口桂利奈「私たちは愛里寿に会いに来ただけですから！」

宇津木優季「だよねえ」

丸山紗季「……」

大野あや「紗希ちゃんもそうだとおっしゃってます！」

角谷「平成版も悪くはないんだけど、やっぱり小美人は双子じゃないとねー」

阪口「わかってますね会長!」サムズアップ

山郷あゆみ「ねえ、それ何の話?」

小山「あはは」

???「皆さん。こんにちは」

阪口「あ、愛里寿の声……だ……」クル

宇津木「どうしたの桂利奈ちゃ……」クル

山郷「……?!?!」

愛里寿「……ど、どうかしましたか?」カタグルマシテル

檸檬「こんにちわ」カタグルマサレテル

澤「え、えーと……」

大野「お、お……」

山郷「おおお、おお?」

愛里寿「(オットセイかな?)」

丸山「……おめでた?」

「「それだ!!」」

角谷「そんなわけないでしょーが」

澤「すみません、本ー当つにすみません!」ペコペコ

愛里寿+檸檬「?」

*

迷彩色模様のボコ(部長)『檸檬君が見つかった?』

ベレー帽着用ボコ(千代)『ええ。私の娘が園内で見つけたそうです。私の携帯に直接連絡がありまして、擬宝珠さんのお母さまにも確認を取って頂きました。間違いありません』

右手包帯茶色ボコ(中川)『よかったですね』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『本当にね。あら?纏ちゃんは?』

モヒカン眼帯ボコ(本田)『纏さんならお母さんのところに行きましたよ』

右手包帯茶色ボコ(中川)『バイクに乗って本人の性格が変わるのはともかく、どう

して着ぐるみの顔つきまで変わるんだらう?』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『とにかくこれで一件落着ね』

迷彩色模様のボコ(部長)『いや、そうもいかんだ』

右手包帯茶色ボコ(中川)『部長。といいますと?』

迷彩色模様のボコ(部長)『その茨城県警の刑事部3課から連絡があった。つい1時間ほど前、ボコミュージアム周辺で尻パーの穴衛門の目撃情報があったそうだ』

モヒカン眼帯ボコ(本田)『尻パーの穴衛門ですって?』

右手包帯茶色ボコ(中川)『あの尻パー穴衛門ですか。それは困りましたね』

赤眼帯ロン毛ボコ(??)『尻パーめ!今度こそ逃がさんぞ!』

シリパー シリパー アナエモン……シリパー……

ベレー帽着用ボコ(千代)『……あの、すいません。一体何のお話をされているんですか?』

迷彩色模様のボコ(部長)『ああ、すいません島田さん』

右手包帯茶色ボコ(中川)『尻パーの穴衛門は、北関東でその名をはせた伝説的なスリなんです。スリにもいくつか種類があるんですが、穴衛門はイベント会場や雑踏を狙って犯行を重ねる。いわゆる平場師ひらばしに分類されるタイプです』

迷彩色模様のボコ（部長）『尻パーという通称に關してですが。パーは財布の隠語です。いわゆる尻ポケット……ズボンのお尻ポケットに刺した財布を狙うことから通称がつけられました。財布から高額紙幣だけを抜き取って元に戻すため、被害が発覺しにくいという厄介な相手です』

ベレー帽着用ボコ（千代）『……もうちよつと名前は何とかならなかつたんですか？』
左手包帯黒色ボコ（麗子）『お気持ちわかりますが……』

右手包帯茶色ボコ（中川）『最初はもつと直截的にケツパー穴衛門と呼ばれていたそうですよ。それがケツパー穴衛門だとさすがにどうかということ、尻パー穴衛門になつたと聞いています。ちなみに穴衛門は本名だとか』

ベレー帽着用ボコ（千代）『ですから！ けつけつ尻尻と連呼しないでいただけますか！？ 大体、ケツを尻と呼び変えても大して意味はかわらないでしょうが！』ブンブン！

右手包帯茶色ボコ（中川）『まあまあ……』

迷彩色模様のボコ（部長）『その尻パー穴衛門が現れたということは、奴の手口から考えて間違いなくここを狙ってくるでしょう』

右手包帯茶色ボコ（中川）『部長。どうします？』

迷彩色模様のボコ（部長）『うーむ。こればかりは私の独断というわけにもいかんだろう。ここでは新葛飾署はあくまで外様だ。県警本部の判断を仰がずに勝手なことをす

るわけにもいくまい。まずは事務局本部で待機中の署長の判断を仰ぎたいが、まずその前に……」チラリ

ベレー帽着用ボコ(千代)『私としてはアナウンスで園内のお客様に直接注意喚起を行いたいと考えています。警察が自分の存在を認識していることを知れば、いかにそのスリであつても犯行は難しいでしょう』

右手包帯茶色ボコ(中川)『家元。それでは穴衛門が逃げてしまうのではありませんか?』

ベレー帽着用ボコ(千代)『警察当局への協力は惜しむつもりはありません。そしてスリが現行犯でなければ逮捕が難しいということ踏まえたうえで、これだけは申し上げておきます。お客様が被害にあわれる可能性が高い以上、施設内部で現行犯での逮捕を優先した泳がせ捜査をされるのは困ります』

迷彩色模様のボコ(部長)『しかし家元。穴衛門ほどのスリがまだ犯行を犯していないとは考えられません。ここは何卒、身柄確保を最優先にしたいのですが』

ベレー帽着用ボコ(千代)『私にはボコミュージアムの責任者として、お客様に対する責任があります』

赤眼帯ロン毛ボコ(??)『ではこうしてみてもどうでしょう?』

赤眼帯ロン毛ボコ(??)『パレード開始まであと40分です。この間に新葛飾署から来

た手空きのものは県警と協力して園内を搜索させます。幸いにして私服で来ていますからな。穴衛門は名うての手練れですが、まさかこれほど多くの警官が来ているとは思わんでしよう。その間、スリへの注意喚起のアナウンスをしていたいただいても構いません』

赤眼帯ロン毛ボコ(??)『パレード開始直前まで穴衛門が見つからなかった場合、アナウンスにおいて直接、穴衛門を名指しして注意喚起をして下さい。そうすれば相手もそれ以上の犯行は出来ないでしょう』

ベレー帽着用ボコ(千代)『……現状において、それ以外に有効な選択肢はなさそうですね。いいでしょう。それで結構です。大原さん、茨城県警への連絡と説明はお願いしますね』

迷彩色模様のボコ(部長)『お任せください』

ベレー帽着用ボコ(千代)『ところで貴方は誰ですか?』

赤眼帯ロン毛ボコ(??)『誰って……』キグルミノアタマトル

屯田五目須「私だけど」

ベレー帽着用ボコ(千代)『は?』

迷彩色模様ボコ(部長)『しよ、署長?!何をしておられるんですか?』

右手包帯茶色ボコ(中川)『事務局本部におられたのでは?』

署長「いや。両津からインフルエンザの欠員で人手が足りないから数合わせで出てく
ださいと言われてな」

迷彩色模様のボコ(部長)『あ、あのバカつ……!』ワナワナ

*

愛里寿「檸檬はボコのこと好き?」

檸檬「好きじゃ。何度打ちのめされても性懲りもなく立ち上がるところが、どこかイ
チローに似ておる」

愛里寿「(イチロー?) そう、そうなの!ボコは負けても諦めないんだ!」

大野「うう……愛里寿を寝取られちゃったよう……」

宇津木「やっぱ若い娘がいいんだねえ」

澤「人聞きの悪いこと言わないの!」

角谷「はいはい、そのあたりにしておきなさいよ」

小山「お話の途中にごめんね愛里寿ちゃん。お母さんとの連絡は大丈夫だった?」

愛里寿「はい。ミュージアムの事務局に連絡を入れたところ、檸檬ちゃんのお母さまと連絡が取れました。このまま私と一緒にいてほしいそうです。パレードを見た後、事務局本部で合流する予定です」

檸檬「世話をかけるが、よろしく頼むぞ」

阪口「はい！頼まりました！」ビシッ

山郷「はっはー」

大野「檸檬さん！肩をお揉みしましょうか？」

澤「やめなさい！」

檸檬「ふっつ、愉快な人達じゃのう」

小山「（これじゃあ本当に、どちらが年上かわからないわね）」

角谷「檸檬ちゃんはどこから来たのかな？」

檸檬「東京の神田じゃ」

阪口「東京！」

大野「江戸っ子だ！」

山郷「おっとなく！」

丸山「……」

阪口「紗希ちゃんは江戸前の天ぷらそばを食べてみたいそうです!」

角谷「それ本当に丸山ちゃんがそう言ってるの? 阪口ちゃんの個人的な意見じゃないよね?」

大野「じゃあさつきアナウンスしてたのは檸檬さ……檸檬ちゃんのことだったんだ」

山郷「なんで呼び方を変えたの?」

大野「なんか恥ずかしくなっちゃって」

檸檬「若さゆえの過ちというやつじゃない」

小山「(……幼稚園児だよな?)」

檸檬「とはいえ私も人のことは言えぬ。初めて見た生のボコにテンションが上がってしまい、言いつけを守らず駆け出して迷子になってしまったのだから。皆には心配をかけてしまい、今もこうして貴女達のお世話になっておる」

澤「(大人だ……)」

愛里寿「わかるよ。私も初めてボコミュージアムに来た時はそうだったからね」
「フンス!

檸檬「皆もボコが好きなのか?」

角谷「いやあ、それはど 愛里寿「そうだよ?」わーい。あんず、ボコすきー(棒読み)」

澤「こ、これが大洗の学園艦を守り抜いたという生徒会長の処世術……」

小山「うん。これは違うと思うな」

*

つながり眉毛ボコ（両津）『檸檬が見つかったのはよかったが、尻だかケツだかとかいうスリが出ただと？まったく、次から次へと問題が起きやがる』

河嶋家次女「あ、ボコだ！」

河嶋家三女「ボコだボコ！ボコ、握手して！」

つながり眉毛ボコ（両津）『あん？なんだガキどもか。おいお前ら、おじさんは今忙しいからあっちいつてなさい』シツシツ！

河嶋家四女「え？」

河嶋家五女「ボコ、私たちのこときらいなの？」

河嶋桃「おい！こら貴様！仮にもプロのくせに幼い子供たちの夢を壊すとは何事だ！！」

つながり眉毛ボコ（両津）『あつ、しまった！今は着ぐるみ着てたんだつた！』

つながり眉毛ボコ（両津）『……いい、いや。そういうわけじゃないんだが。確かに今はわしが悪かった。でもちよつと今は忙しくてな。パレード始まるまでは、ちよつとおとなしくしておいてくれないか』

河嶋家長男「……このボコ何かおかしいぞ?」

河嶋家三女「そういわれてみれば声が違うような……」

河嶋家次女「いや、声以前に色々とおかしいところがあるでしょ。なんでつながり眉毛なのさ?」

つながり眉毛ボコ(両津)『これは他と区別がつかないからと上司に落書きされたやつで』

河嶋家長男「上司?ボコに上司がいるのか?」

河嶋家三女「ボコはクマー一匹で頑張ってるんだよ。ひよつとして偽物なの?偽ボコなの?」

桃「何?!お前は偽物なのか!」

つながり眉毛ボコ(両津)『まためんどくさそうな奴が……』いや、だからこれには事情があつてだな』イライラ

河嶋家四女「パチモンボコ!」

河嶋家五女「パチボコ?」

つながり眉毛ボコ(両津)『君たち。まずはわしの話を……』イライライライラ
桃「よしつ、わかった!」パシッ!

河嶋家長男「(あ、これ絶対にわかってないやつだ)」

桃「はっはっは！この偽物ボコめ！ボコミュージアムの職員は騙せても、この河嶋桃の眼は騙せんぞ！神妙にお縄を頂戴しろ！」ピシッ！

河嶋家次女「姉さん。今そういうのはいいから」

桃「え？」

桃「……いい、いや。大丈夫だ！この私に任せているんだ！さあかかってこい偽物め！

この河嶋桃が相手になってやるぞ！」シユツシユ

つながり眉毛ボコ（両津）『だからわしの話を』イライライライライライ

桃「どうした？かかってこいのか？ふっふっふ。私が怖いんだな？怖いんだろう？」

ドヤア

つながり眉毛ボコ（両津）「プチッ

つながり眉毛ボコ（両津）『このモノクル女、ガキだと思つて下手に出てりや調子に乗りやがつて、簀巻きにして大洗港に沈めてやろうか!!』

桃「」

桃ちゃん「お、弟妹たちの命だけはお助けを……」プルプル

河嶋家長男「いやなんか本当にもうすいません」

桃ちゃん「お前たちーに、逃げるからな!お姉ちゃんにすっかりついてきなさい!」ブルブル

河嶋家次女「はいはい。貴女達も騒いでないでお姉ちゃんの後追いかけるよ」

河嶋家三女+四女+五女「二はーい」

桃ちゃん「きよ、今日のところはこのあたりにおいて『ああ?』ふえええん!!!」タタタツ……

つながり眉毛ボコ(両津)『まったく。余計な時間をとられちゃった。さつさと『あああ!!!』……今度は何だ?』

みほ「ボコだよボコ!うわあ!眉毛がつながってるボコなんて初めて見たあ!レアだよ、レアボコだよ!!さすがはボコムュージামのイベントだなあ!」パシャパシャパシャ

秋山「というよりも……」

武部「どこかで見たことある気がするんだけど……」

五十鈴「すいません。このボコ焼きそばの納豆入りを二人前下さいな」

冷泉「うん。このボコアイス干し芋味はいけるな」モグモグ

つながり眉毛ボコ(両津)『またこのパターンかよ……』

*

尻パーの穴衛門「チャンチャンチャチャララランララララ♪」

穴衛門「ランランララララララ（……サツの気配がプンプンしやがるな）」

穴衛門「はいはい、通りますよ（こりや警備以外にも私服がだいぶ紛れ込んでやがるな……それにしても多すぎる気もするが）」

穴衛門「おつとごめんよ！（といつても、俺にとつちや大した障害にはならんがな）」

穴衛門「はいごめんなすつて！（木の葉を隠すなら森の中、書類を隠すなら図書館の中、そして犯罪を隠すには、警備が嚴重な雑踏に限るつてもよ）」

穴衛門「はいはい、すいませんね。ちよつと戻りますよ（それにここは改修工事をしたばかりで、監視カメラの工事が追い付いていないことは調査済み）」

穴衛門「はいはいごめんね（安心してお勤めが出来るつてもよ）」

??? 「……」

穴衛門「（ふん。どいつもこいつもしけてやがるな。キャツシユレスだか何か知らないが、ほとんど高額紙幣がありやしねえ。もう一回りはしねえと、月どころか週も越せねえな）」

マモナクボノダイコウシンガハジマリマス!ゴカンランキボウノオキヤクサマハ

……

穴衛門「(ボコミュージアムか。昔はよく来たもんだが……)」

穴衛門「(止めだ止めだ。辛気臭えのはなしだ。鬱陶しい気分は勤めに差し支えるかな。さつさと切り替えていかなきゃな)」

???「おい」

穴衛門「っ!」

穴衛門「へえ、なんでしょうか(女の声?)」クルリ

愛里寿「……」

檸檬「……」

穴衛門「どうかしたかい、お嬢ちゃんたち(なんでい、ガキじゃねえか。驚かせやがって)」

愛里寿「貴方、人の財布を取ったでしょう」

穴衛門「っ!」

*

秋山「やはり両津殿でしたか」

武部「そんな個性的な眉毛は、井〇咲楽か両さんぐらいだもんね」

冷泉「どんな例えだ」

つながり眉毛ボコ（両津）『好き勝手言いやがるなこいつら』

みほ「いいですね両津さん！そのまま今度は両手を挙げてみましょう！万歳のポーズで！」
「パシャパシャパシャ」

つながり眉毛ボコ（両津）『だからこんなことしてる暇ねえって言ってるだろ！』

五十鈴「それにしてもそんなに有名なスリがいるのですか」モグモグ

つながり眉毛ボコ（両津）『そうだ。お前らも注意しろよ。人間、案外と自分の財布にいくら入れているかという記憶はあいまいなものだからな。キャッシュレスやカード使用が増えたことでその傾向はさらに強まっている。サイバー犯罪に注目が集まっているからこそ、古典的なやり方も馬鹿には出来ないんだ』

秋山「注意します」

つながり眉毛ボコ（両津）『注意しても対応しきれるもんじゃないけどな。とにかく変な奴を見つけたら近づくな。じゃあわしは行くぞ』

みほ「はい！じゃあついていきますね！」

つながり眉毛ボコ（両津）『……西住君。君、わしの話を聞いてた？』

みほ「まだとりたい写真がありますので」

つながり眉毛ボコ(両津)『……あのな。こう言うことは言いたくはないんだが、こつちだつて仕事があるんだよ』

みほ「さつき両津さんが泣かせた片眼鏡のお姉さん。あの人は大洗の河嶋桃先輩といまして、私が敬愛する先輩です」

武部「(……そうだったっけ?)」

秋山「(また微妙なラインの言い回しをしますね)」

みほ「それとこれはあくまで一般論ですけど」

つながり眉毛ボコ(両津)『?』

みほ「現役 of 警察官が女子高生を泣かせていたつていうのは、外聞がよくないと思いますよ」ニッコリ

つながり眉毛ボコ(両津)『』

秋山「うわあ……うわあ……」

冷泉「(えげつない。西住流まじえげつない)」

五十鈴「(このみそ味のお好み焼きもおいしいですねえ)」モグモグ

みほ「じゃ、よろしくお願ひしますね♪」

つながり眉毛ボコ（両津）『……人畜無害な顔をしやがって。こいつ間違ひなく、あの西住の家元の血を引いてるわ』

*

【熊本県 西住流本宅】

西住しほ「ブアーツクシヨイー!!!」

井手上菊代「うわっ、汚ったな！」

*

澤「ちよ、ちよつと愛里寿ちゃん?!」

山郷「急に何を言い出すの！」

角谷「（小山あ。警備本部に連絡）」

小山「（りよーかい）」

穴衛門「ふーん。お嬢ちゃんや」ズイツ

澤「ちよ、ちよつとお爺さん」

穴衛門「人を犯罪者呼ばわりするからには、何か証拠があるんだろうね」

愛里寿「私はあなたが雑踏の中で人の財布を取るのを見た。そこからお札を抜き取つ

て戻すところも」

穴衛門「それじゃあ、その人は今どこにいるんだね?私の財布の中に入っているお札が、その人のものだど、誰が、どうやって証明するんだね(……つち、俺は何をしてるんだ)」

愛里寿「でも私は見た!」

穴衛門「見たただけだろ?君は一体どんな権利があつて、私の人生を左右しようというのかな?しかもその証拠は、自分が見たという記憶だけが頼りだという(こんなガキに関わってる暇はねえんだ。さつさと離れちまえ)」

愛里寿「私はっ!」

穴衛門「君のその記憶が確かだと、いったい誰が証明するんだ?君は自分の記憶だけが絶対的に正しくて、私の意見は完全に間違つていてもいいつもりかね?(そうだ、さつさと離れちまえ)」

愛里寿「私は嘘なんかついていない!」

穴衛門「そう、嘘はついていないかもしれない。そして繰り返しになるが、君の意見が正しいと、いったい誰が証明してくれるんだね?一緒にいた君の友人は何も見えていないという。君は自分の友人を、自分自身のあいまいな記憶を証明したいがための自己満足に、つまらない虚栄心と薄っぺらい正義感のために付き合わせようというのかな?

(何をイラついているんだ、俺は)

愛里寿「私は、私は見たんどもん！」

角谷「ちよつとお爺さん。さすがにそれは聞き捨てならない……」

檸檬「では何故貴方は、アリスの眼を見ないのじゃ？」

穴衛門「……はあ？(なんだこのガキ)」

檸檬「疚しいことがないのなら、どうしてアリスから視線を逸らすのじゃ？」

穴衛門「……」

檸檬「自分の振る舞いに疚しいところがある。そう思っているからこそ、お主はアリスの眼をみれないんじゃ！」

愛里寿「檸檬……」

檸檬「アリスは嘘つきじゃない！嘘つきはお前じゃ！」

穴衛門「つち(これ以上、騒がれると拙い)」

穴衛門「……ガキども、命が惜しけりや声を出すな」チャキ

澤「っ……！」

角谷「折り畳みナイフ……いや、ただの棒をブラフとして見せているだけかも。どちらにしても、この距離からだと確証はもてない」

角谷「(仮に本物だとして、カバンを切るためにもっていたか。威嚇が目的……いや、楽観は禁物だね)」

角谷「お爺さん。それをこちらに向けた段階で、貴女は強盗罪になるよ? (小山、みんなを私の後ろに下がらせて)」

小山「(了解)」

穴衛門「こそこそとしゃべるんじゃねえよ……黙って俺を見送れ。そうすればお前らのお友達には何もしねえと約束してやる」

愛里寿「……」

檸檬「……」

角谷「(いいから下がって)……残念だけど、武器を此方に突きつける人間を信用出来るほど私は楽観的じゃないんだなこれが。何より私は口約束というものがどうにも苦手だね、一度、それを信じてひどい目にあわされたもんだから」

穴衛門「ふん。口の回るガキだ」

角谷「そんなに難しいことじゃないよ。大体、初対面のあなたをどうやって信用すればいいのかな?」

穴衛門「取引するつもりはねえ。これは脅迫だ」

角谷「ふーん。じゃあ尚更だね。仮にあなたの言うことに従つたとしても、私たちが危害を加えられないという保証にならないんじゃない？」

穴衛門「……つち（小娘共に追いつかれるほど、まだ老いたつもりはねえ。このまま走つて逃げちまうか）」

穴衛門「（かといつて目立つのも困る）」

角谷「（……とても考えているのかな？どちらにしても、このままのにらみ合いが長引けば周囲も不信に思うだろうし。さつき小山に連絡させた警備員が来るまで、何とかこのままの膠着状態を維持しなきゃね）」

檸檬「お主」

角谷「っ！（ちよい、ちよいちよい！）」

大野「ちよ、ちよつと檸檬ちゃん！」

澤「だ、駄目だよ！相手を刺激しちゃ！」

檸檬「お主は知らないだろうから、教えてやろう」

穴衛門「ほう。お嬢ちゃんが俺に何を教えてくれるのかな？」

檸檬「ボコが好きの人に悪い人はいないのじゃ」

穴衛門「……はあ？」

檸檬「ボコは何度倒されても、何度負けても立ち上がるんじや。戦う心を持っているから。戦う心をなくしたら、もうそればボコじゃないから。誰に何と言われようとも、ボコは自分自身を信じてるから」

檸檬「アリス」

愛里寿「何かな」

檸檬「私はアリスを信じるぞ」

檸檬「だってアリスも私を信じてくれたから。迷子で不安だった私を見つけてくれて、一緒に笑ってくれたから。だから今度は私がアリスを信じる番じゃ」

愛里寿「……檸檬ちゃん」

丸山「……私も」

阪口「紗希ちゃん?!」

丸山「……私は、この人が何をしてたのかを見てない。でも、私は愛里寿を信じる」

大野「あ、私も私も！」

宇津木「私も〜」

山郷「私だつて愛里寿を信じるよ！」

阪口「私だつて！」

澤「え、え？」

大野「梓、ノリ悪いよ！」

澤「そういう問題じゃないでしょ！」

澤「ずるいよ皆！私だつて、愛里寿を信じてる……いや、信じるよ！」

角谷「あつはつは、こりや参つたねえ（あーどうしようかなこりや）」

角谷「ここは民主主義国家だよ？多数決なら6対1……いや、8対1か？勘定に入れてもいいよね小山？（いざとなつたらみんなと一緒に逃げてね）」

小山「当たり前でしょ（今更、杏を置いていけるわけないでしょ。桃ちゃんに怒られちゃうしね）」

角谷「それで、お爺さんはどーするのさ」

穴衛門「……けるな」

角谷「なーに？何だつて？（うーん間に合うかな？）」

穴衛門「ふぎけるな貴様ら!!」

ビクッ!

穴衛門「安い上に下らない青春ドラマを見せやがって、この俺を舐めてんのか? 舐めてるんだらう貴様らあ!!」

ナニナニ? ケンカ? ケイビインヲヨボウカ?

穴衛門「何が信じているだ。何がボコを好きな奴に悪い人はいないだ! どいつもこいつも俺のことを知らないくせに、俺のことを馬鹿にしやがて! 俺が何も出来ない、何も知らない、何もやってこなかったと思ってるのか!」

角谷「あー、こりやちよつとばかし導火線に火をつけちやったかもね(まあ結果オーライかな)」

小山「ちよ、ちよつと杏、どうするの!」

角谷「大丈夫でしょ」チラッ

小山「何が!」

角谷「だって、ほら」

穴衛門「俺がどんな気持ちで、こんなみじめなことをしているのか、ぬくぬくと日の

当たるところを生きてきたガキに理解出来てたまるか!!」

??? 『だろうな。だが自分自身を信じ切れずにまともな生き方をあきらめた段階で、お前はボコとやらの足元にも及ばねえよ』

角谷 「間に合ったみたいだしね」

つながり眉毛ボコ(両津) 『子供相手に何してやがるんだ、このくそ爺!!』ドロップキック!
ク!

穴衛門 「ぐふええ!」ズサササ……

つながり眉毛ボコ(両津) 『この野郎、根性の腐ったことを堂々と抜かして恥ずかしくねえのか! お前が負けたのは社会じゃねえ! お前自身だ馬鹿野郎! そのふざけた性根を叩き直してやる!!』ポカスカ

みほ 「かまいません両津さん! そのままボコボコにしてやってください! ボコボコ大作戦です!!」

つながり眉毛ボコ(両津) 『何の根拠もないが、心強い応援ありがとうよ! ほりや逆工

ビ固めえ!!!」

穴衛門「き、着ぐるみでどうやって、あたたたたたああああ!!!」

角谷「おー、よく来てくれたね西住ちゃん達」

みほ「はい!騒ぎがあると両津さんが聞きつけて、その後を追ってきました」

角谷「あつはつは……さつきまではみんなの手前で強がって見せたけど、今は膝がガクガクしてるよ」

みほ「ご無事で何よりでした」

テキサスクローバーホールド! ギャアア!

角谷「こんな時に言うことじゃないかもしれないけど、西住ちゃんはあのボコが勝つてもいいの?」

みほ「これは公式じゃないですからノーカンです!」

角谷「はつはつは、なるほどね。それもいいかな」

冷泉「そういう問題なのか?」

武部「みんな大丈夫?!怪我はなかった?!」

大野「せ、先輩—!!」

澤「こ、怖かったです……」ガクブル

山郷「こ、殺されるかと思いました」

武部「おーよしよし！よく頑張った！あんた達はえらい！よくぞ愛里寿ちゃんと女の子を守り抜いた！あんた達は私の誇りよ！おーよしよし！」

ウサギさんチーム「二二ふええええーん!!!怖かったです!!（……）」「二二

五十鈴「やつぱりおかん気質ですよね」

冷泉「あやし方を見ているとムツゴウウっぽいところもあるぞ」

秋山「武部沙織のガールズ王国……」

武部「そこっ！聞こえてるからね!!」ガーツ！

*

みほ「愛里寿ちゃん！」

愛里寿「みほさん。ご心配をお掛けしました」

みほ「そんなことよりも、怪我は無かった？」

愛里寿「はい。少し怖かったですけれども。角谷さんと小山さん、ウサギさんチームの皆さんと」

愛里寿「それに」チラ

檸檬「?」

愛里寿「檸檬が私を信じてくれたから」

檸檬「……うん!」

みほ「愛里寿ちゃんの新しいお友達?」

愛里寿「うん!私の大切な友達だよ!」

檸檬「……そうじゃ!大切な友達じゃ!」

*

アノボコハ ソノハナシニハツツキガアツテネ シラナカッタ!

秋山「……檸檬殿は初対面とお聞きしていますが、随分と話が盛り上がってますねえ」

冷泉「ボコ談議でな」

五十鈴「幼稚園と、年齢は中学生の飛び級大学生、そして高校生。ボコは世代の壁を

やすやすと越えていくんですね」

ソレデソノトキノボコガ ダヨネ ソ、ソウナノカ

武部「……あの3人、ボコに関する限りでは精神年齢が実年齢と逆転してない?」

五十鈴「まあそれもいいのではありませんか?何事でも熱中できるものがあるという

ことは、いいものですよ」モグモグ

秋山「……時に五十鈴殿。そのアメリカンドックは何本目です?」

五十鈴 「まだたったの4本目ですね」

冷泉（無視して）とところで両津さんはどこに行ったんだ？茨城県警に犯人を突き渡したところまでは見ていたが」

武部 「もうすぐボコの大打進が始まるから、その点呼に行ったみたいだよ」

*

〔ボコの大打進 スタート地点〕

迷彩色模様のボコ（部長）『お前というやつは、署長に何をさせているんだ!?』ブンブンブン

つながり眉毛ボコ（両津）『ちょ、ちよつと部長！頭揺らさないてくださいよ！』ブンブンブン

迷彩色模様のボコ（部長）『うるさい！お前のような奴は揺らされたほうが頭の外れたねじが元に戻るだろう！』ブンブンブン

右手包帯茶色ボコ（中川）『まあまあ部長。そろそろ始まりますので、その辺りで』迷彩色模様のボコ（部長）『まったく……両津！帰ったらこの説教の続きをするからな！』ポテポテポテ

左手包帯黒色ボコ（麗子）『可愛い足音ね。まあ皆同じなんだけど』
つながり眉毛ボコ（両津）『あー、ひどい目にあつた。せつかく犯人を逮捕したつてい

うのに、あの石頭め』

右手包帯茶色ボコ(中川)『部長に欠員メンバーの報告を入れないからですよ』

つながり眉毛ボコ(両津)『そんなもの、直接署長を捕まえたほうが話が早いだろうが!』

右手包帯茶色ボコ(中川)『それはそうかもしれませんが』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『それにしても動きにくいわねえ』

背中に傷があるボコ(纏)『手足が太いから余計にバランスがとりづらいんだよね』

右手包帯茶色ボコ(中川)『そう考えるとプロのスーツアクターってやっぱりすごいですよね。こんな見えづらい視界であれだけ大きなアクションを平気でこなすんですからね』

つながり眉毛ボコ(両津)『お前らは気合が足りないんだよ、気合が!わしを見ろ!これで犯人を検挙したぞ』

左手包帯黒色ボコ(麗子)『両ちゃんには絵崎教授の補助AIを積んでるじゃない!』

背中に傷があるボコ(纏)『そうだと勘吉。体力バカのお前と私達を一緒にするな』

つながり眉毛ボコ(両津)『はん。何とでも言え。そもそもこのスーツの改修に取り組んだのは、このわしだし?絵崎のAIというのが気に入らんが、これぐらいの見返りが

あつてもむしろ当然……」

背中に傷があるボコ（纏）『この野郎！』ウデヒツパル

つながり眉毛ボコ（両津）『はっはっは！そんな、も……』

つながり眉毛ボコ（両津）『あれ？あれれれ？お、おい、ちよつとおおお!!!』

ズッターン!!!

右手包帯茶色ボコ（中川）『先輩がひつくり返つた！』

つながり眉毛ボコ（両津）『ま、纏、お前え……』ハラホロヒレハレ

背中に傷があるボコ（纏）『ちよ、ちよつと。私はそんなに強く引つ張つてないぞ?!』

絵崎コロ助教授「ふーむ、ちよつと見せたまえ」

右手包帯茶色ボコ（中川）『教授！』

絵崎教授「ふーむ。これがあーなつて、あれがこーなつて、ここがあーなつてるから

……」

右手包帯茶色ボコ（中川）『教授。どうですか?』

絵崎教授「どうやらゴリラ君の野蛮人のような体力によつて行われたアクションに、

『E Z A K I・M k—I I』の処理能力が追い付いていないようだね！このままだとA Iの頭がパーになってしまうのも時間の問題だろう」

つながり眉毛ボコ（両津）『ふざけんなこら！お前の開発した奴だろう、何とかしろ！』

絵崎教授「ここまでの負荷がかかることは想定外だよ!大体、着ぐるみの格闘アクションを想定しているのに、どうしてボクシング13ラウンドをフルで戦ったような負荷がかかっているのかね!」

右手包帯茶色ボコ(中川)『教授。ではどうすれば?』

絵崎教授「ふーむそうだね」

絵崎教授「今の『EZAKI・Mk-11』の状況を例えるなら、満々と水が満ちたコップの表面張力に頼りながら、コインを一枚ずつ入れていってるとようなものだね。だからさっさと脱ぐのが一番かな?」

つながらり眉毛ボコ(両津)『脱ぐ、脱ぐ脱ぐぞ!こんな危ないものいつまでも来ているのか……』

赤眼帯ロン毛ボコ(署長)『おお、両津!今回はお手柄だったな!』ポンツ

「「「「あっ」」」」

ピーツ

つながり眉毛ボコ（両津）『……おい、絵崎』

絵崎教授「いかんいかん。来週のニューヨーク講演の原稿整理がまだだつ……」

つながり眉毛ボコ（両津）『待てこら！これを何とかしてから行け！』

絵崎教授「無理だ！もうこうなったら『EZAKI・Mk—II』にこつそりと取り付けた『BOKOZAM・システム』は誰にも止められん！」

ファイルセーフカイジヨ システムキドウシマス

つながり眉毛ボコ（両津）『何を載せてるんだ、お前はああ!!!』

絵崎教授「それが科学者の業だからね！」

赤眼帯ロン毛ボコ（署長）『あの、ひよつとして私のせい？』

*

王大河『さあ、ついに『IOI匹ボコ大行進！ボコ大発生中だボコ！』の予定時刻を迎えました。解説の児玉さん。現在のお気持ちはいかがでしょう？』

児玉七郎『そうだねえ。昼ご飯に食べたボコ定食の味噌汁が赤だしだったけど、あのメニニューなら僕は普通の味噌のほうがよかったかなあ』

ワーワー トリオサエロ！ムリデスー！

王『(無視して)はい!今回、ボコミュージアムではボコられクマのボコ制作委員会と協議し、何と新たに101体のボコを生み出したそうです!いやあ凄いですねえ。バ○ダイのモビルスーツバリエーションもびつくりの後付け便乗商法ですね!やることがセコイ!よつ!商売上手の守銭奴!!』

キヤー! ヤメロカンキチ! ニゲロー!

児玉『それは悪口じゃないの?(何か後ろが騒がしいような)』
 ???『うおおおお!みんな!どうかおいらに力をくれー!』

王+児玉『……は?』

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『よお!おいらがボコだぜ!(た、助けてくれええ!!!)』

檸檬「イチローのボコじゃ!」

みほ「両津さん!ボコになりきってますね!」ウンウン

愛里寿「がんばれボコー!!」ブンブン

冷泉「……おい、あれどう見てもやばくないか?」

秋山「目が赤く光ってますね……」

武部「それに、何か小刻みに動いてる気がする……」

角谷「うーん。噴火5後秒前って感じだねえ」ホシイモモグモグ

小山「とつくに噴火してる気がするけど……」

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『おう！よく来やがったなお前！（おお！とまれとまれとまれええ!!）』

桃ちゃん「ひえええ!!さっきのボコがお礼返しに来たああ!!」ガクガクブルブル

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『おいらが相手してやろう！ぼっこぼこにしてやるぜ！（止まれっていうの……止まれって!）』

桃ちゃん「びえええ!!もう駄目だああ!!私はここで死んじやうんだああ!!!」

河嶋家次女「そんなわけないでしょ……」

河嶋家三女「がんばれおねーちゃん！」

河嶋家四女「がんばれおねーたん！」

河嶋家五女「がんばえー！」

河嶋家長男「いやなんかもう、本当にすいません。お騒がせしました」

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『はっはっは！元気がいいな！よし、おまえら！』

まとめてやってやるぜ!かかってこい!(こなくていい、こなくていいからな!)(

河嶋家三女「え、ほんと?」

河嶋家四女「じゃあいくぞ!!」

桃「な、ば、馬鹿!おい、やめろ!!殺されるぞ!!」

河嶋家次女「そんなわけないでしょ」

河嶋家長男「なんかもう本当にもうすいません」

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『はっはっは!さあ、こい!(く、くるなああ!!!)』

河嶋家五女「やー!」ポスッ

つながり眉毛ボコ(両津)『やられちまったぜ!(どわあああああ!!!)』ゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……

桃ちゃん「……は?」

河嶋家長男「うおっ、めちやくちや飛んだな」

河嶋家次女「というか、あれ曲がっちゃいけない方向に関節が曲がつてたような……」

王『事前の段取りと違うけど盛り上がってるからいいや(何ということでしょう!何

というプロ根性！何というボコ精神！これがイッツアボコワールド、世界を幸せにするボコの気高き精神の発露！立てば着ぐるみ、座ればお荷物、喧嘩の後には死屍累々！これぞボコだ！全世界で数百人いるかないかのボコファンが待ち望んでいたボコです！』

兎玉『……ノーコメントで』

*

ワー ワー ボコー！ガンバレー！ウワア……ボ、ボコオー！

右手包帯茶色ボコ（中川）『……盛り上がってますね』

左手包帯黒色ボコ（麗子）『そりゃ、あれだけ激しいアクションをすればねえ』

絵崎教授「ふーむ。実に興味深い現象だな。いいデータが取れそうだ」

背中に傷があるボコ（纏）『（悪魔かこの爺？）』

迷彩色模様のボコ（部長）『どうしましょう署長。両津はどうせほつといてもなんとかなりません』

赤眼帯ロン毛ボコ（署長）『うーん……（あれ私の責任になるのかな？）』

絵崎教授「皆さんご安心を。あれは見ての通り、観客に被害を与えるものではありません。中のゴリラ君は激しくシェイクされるだろうが、あと一時間ほどで内蔵されたバッテリーが切れたら止まるからね！」

迷彩色模様のボコ(部長)『なら大丈夫ですな』

赤眼帯ロン毛ボコ(署長)『うーむ……』

赤眼帯ロン毛ボコ(署長)『まつ、いいか』

ベレー帽着用ボコ(千代)『……そ、それではパレードの用意を(い、いいのかしら?)』

*

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『みんな!おいらに力をわけてくれ!!(う、っ

ちよ、は、吐き気が……ちよ、ま……)』

檸檬「イチロー!がんばれー!」

みほ「立つんだボコー!!」

愛里寿「がんばれボコー!!」

つながり眉毛ボコ(BOKOZAM)『うおおお!みなぎってきたぜええ!!(……ちよ、

ま)』

ギャー！

【完！】